

赤い星

第1号

革命戦線関西地方委員会

☆ 革命戦争路線と大衆路線を堅持し、革命戦争統一戦線を形成せよ！

☆ 遊撃戦争に呼応し、大衆戦線、支援網を拡大せよ！

☆ 人民戦線派（社共・八派）、蜂起派を解体し、革命戦争派に統合せよ！

☆ 大陸革命戦争、先進国武装闘争を世界革命戦争の戦略的反攻に向けて統合せよ！

目次

「赤い星」発刊にあたって	2
世界革命戦争の戦略的諸問題	5
I 日本革命戦争の開始万才！	5
II 戦略論争の総括	6
III 世界革命戦争の歴史の総括	19
IV 世界革命戦争と世界プロ独・共産主義	35
獄中同志の作風に学び、あわせて建党 建軍活動の前進のために	45
4 28 闘争と日本階級闘争の到達点	57
(1) 4・28 闘争に現われた動向	57
(2) 統一戦線について	69

武器奪取闘争、徴発などの都市ゲリラ戦の展開、他方では、4・28闘争での革命戦争派の公然たる登場。明らかにかつ新たな時代が開始されたことを物語っている。革命戦争の余波は至るところにあらわれている。5・19沖縄ゼネストと沖縄人民の大衆的武装の持続、東京・京都に於ける市街戦。三里塚を頂点とする全国基地闘争、大衆的武装とゲリラ戦化。春闘交運スト。公害闘争での衝突。釜ヶ崎暴動。自衛官の反軍闘争、軍隊内暴動、反乱。

世界に眼を投じれば、インドシナ大陸革命戦争の勝利的前進、ラオス進軍のせん滅。インド・パキスタン・セイロンに於ける革命戦争の開始・発展・結合と国際的内戦化。アメリカ反戦闘争の爆発（ゲリラ戦の持続と帰還兵・現役兵のデモ・軍隊暴動・反乱（黒人反乱・上官・将校殺害・韓国での黒人兵デモ・爆破）、大衆的実力闘争の高揚）。英・仏でのゼネスト機運、アイルランドの都市ゲリラ戦の大規模化。中近東・トルコでの革命戦争。

☆

☆

☆

赤軍派と日共革命左派が「71年は我々の年である」と宣言したように、日本は、世界はすばらしい革命の前進を示している。勿論、喜んでばかりはいられない。革命の前進に比べて、我々の力は余りにも弱く、小さいからである。このことは、我々の総括の問題である。『赤い星』は、そのためのささやかな試みである。

革命戦線は、赤軍派結成以来、幾多の試練を経、数々の迂余曲折をたどってきた。そして、花園同志も指摘するように、古い党組織と新たな質を代表する中央軍との接ぎ木、党と軍との二元論という事態のなかで、古い党組織の一環を構成してきた。政治軍事路線の二元論の組織路線への反映として、その混乱を革命戦線は表現してきた。この混乱のなかで、革命戦線は精彩を失い、組織的混乱をひきおこし、十分な機能を果たすことができなかつた。

今、革命戦争の開始のなかで、革命戦線は革命戦争に耐え、担い、支えてゆく組織へと生きかえらなければならぬ。赤軍派と日共革命左派が「71年は我々の年である」と宣言したように、日本は、世界はすばらしい革命の前進を示している。勿論、喜んでばかりはいられない。革命の前進に比べて、我々の力は余りにも弱く、小さいからである。このことは、我々の総括の問題である。『赤い星』は、そのためのささやかな試みである。革命戦線は、赤軍派結成以来、幾多の試練を経、数々の迂余曲折をたどってきた。そして、花園同志も指摘するように、古い党組織と新たな質を代表する中央軍との接ぎ木、党と軍との二元論という事態のなかで、古い党組織の一環を構成してきた。政治軍事路線の二元論の組織路線への反映として、その混乱を革命戦線は表現してきた。この混乱のなかで、革命戦線は精彩を失い、組織的混乱をひきおこし、十分な機能を果たすことができなかつた。

軍が存在し、軍が発展することに、革命戦線の存在の意義も、発展の動力も規定されている。だが、それは、軍だけが武装し、革命戦線が軍の再生産工場と兵站の役割だけを果たすことを意味するものではない。確かにその役割は重要であり、欠かすことはできないが、それが全てではない。革命戦線はもっと広く、深い役割を果たさなければならぬ。一言で言えば、大衆に宣伝し、大衆を組織し、大衆を武装させることである。物事を少ししても注意深く考察する人ならば、革命の軍隊（人民の軍隊）の力の源は、大衆のなかにあることを、大衆を組織し、大衆を武装させるところに、勝利の原動力があることを認めないわけにはゆかない。本文でも述べているように、革命戦争路線と大衆路線は切っても切り離せない関係にある。我々が、今、意識的にこの二つの路線の旗をかかげたのはこのためである。そして、革命戦線は、軍と大衆の結び目に位置し、重要な役割を果たさなければならぬ。とりわけ、現在の段階では、このことは死活的な意味をもっている。

我々は以上の基本的意味を確認したうえで、本号を提起した。全党に全軍の同志、革命戦線の全同志にこれを提起し、相互批判・自己批判の原則にしたがって党内闘争を組織し、建党・建軍活動を前進させることを第一義的課題としている。又、日共革命左派・安保共闘の戦友をはじめとして、あらゆる諸党派、大衆組織、個人に問題提起し、非実践的観念的論争ではなく、実践と結びついた真剣な論争を望んでいる。我々の基本的態度は、「闘いながら学べ」ということであり、「大衆から学べ」ということである。我々の未熟さ、不十分性を我々は意識しているし、その克服・止揚のための実践的（組織的）・理論的闘いをますます強めなければならぬと考えている。

我々は、本号を、現在あらゆる戦線で闘っている同志・友人に、又、共感を寄せてくれている広範な人々に捧げるとともに、とりわけ、闘いの渦中で戦線から離れていった同志達に呼びかけるものである。

「今日、彼が、人民と結合して闘うなら、彼は革命的である。明日、彼が人民と結合せず人民を抑圧するな

らば、彼は反革命的である。」（毛沢東）

☆

☆

☆

なお、本号の理論的諸問題についてふれておく。本号では、ブンド連合派の体系的批判は展開されていない。いわゆるイデオロギー問題（方法論、唯物史観、経済学等）にはふれていない。それよりも以上に、具体的な経済分析、階級分析が欠けている。これは、「我々の味方は誰か、我々の敵は誰か」という問題として、最も重要な問題である。だが、それはアプリアリなものではなく、闘いのなかで明らかにされてゆくべき問題である。今後の最大の課題である。又、ブンド連合派のみならず、日向派、八派、革マル、社共などへの批判も今後できるかぎり展開してゆくつもりである。勿論、それは、日向派や革マルの好きな批判的批判（自己満足的な）であってはならない。このようなハイエナども、寄生虫どもの列に身をおとすことは、ハイジャック兵士達や戦死した同志達、獄中同志達の革命的魂に吐きかけることを意味する。

「全ての革命家の義務は革命をすることである。」この言葉は我々の出発点であり到達点である。

（71・6・1）

日本革命戦線関西地方委員会

世界革命戦争の戦略的諸問題

I 日本革命戦争の開始万才！

昨年12月の京浜安保共闘の文番襲撃、今年に入ってから弾銃奪取、そして赤軍中央軍による激発作戦等、事態は急転回している。新たな事態は、「革命戦争は開始された」という一言に要約できる。これこそ新たな事態の本質であり、日本階級闘争の全成果がこの一点に濃縮されている。

69年「安保決戦」、大菩薩の敗北、70年「ハイ・ジャック作戦」を経てきた日本人民は、今、世界の革命戦争と、言葉の上だけではなく、現実の「勝利か死か」の戦争の中でしっかりと結びつけられている。この根本的な現実のまえには、社共の議会主義は論外としても、八派、革マルの騒々しいだけの大衆運動と内ゲバは何とみすばらしくちっぽけな塵にみえることか？。始まったばかりの革命戦争は確かにひとしずくの水滴のように見えるかも知れない、しかし、このひとしずくの水滴が、全国到るところから、人民のあらゆる部署からはとぼしり出る時、水滴は集まって細流になり、無数の細流がやがては誰もせき止めることの出来ない巨

大な大河として形成されるであろう。この巨大な歴史の流れに浮んでは消え、消えては浮かぶあぶくの如きものが、社共、八派、革マルであり、長い目でみればそれは現在いかに大きなものに見えるやがては消える運命にある。

われわれは、開始された革命戦争の芽を、国際反革命―政治警察の「ゲリラを芽のうちにつみとれ」という弾圧から守り育て、全ゆる犠牲を払って革命戦争を定着させ、発展させ、社会と人民のあらゆる部署におし広げてゆかなければならない。われわれの「スローガンは、「帝国主義の銃は人民を分断させるが、革命的な兵隊の銃は全人民を結合させる」、「全ゆる可能な革命戦争を開始し、定着させ、発展させるために、大胆に行動を！」、「どんな犠牲を払っても革命戦争に勝利しよう！」ということであり、一言で言えば「人民の戦争―人民の軍隊の旗をかがげよう！」ということである。

勝利の大道、革命戦争の道を勇気をもって進もう！

われわれの革命戦争は、だが日本一国にとじこまった闘いではない。その闘いは、直接に世界の人民の革命戦争と結びついている。インドシナ半島の解放戦士たち、ラテン・アメリカの山岳ゲ

の現実から出発しようではないか。

II 戦略論争の総括

はじめに

69年大菩薩峠の敗北以降、赤軍派は様々なジグザグをくりかえしながら進んできた。この間、花園同志を典型とする獄中組のゲリラ戦の主張を一方の軸とし、またブント党内闘争や京浜安保共闘の遊撃戦の展開とからんで戦略、戦術論争がなされてきた。いわゆる第二次綱領論争は、この戦略論争を基軸にしながら、方法論や共産主義論をも含む形で展開された。

これらの論争のなかでの路線のジグザグは組織の混乱をもたらしてきた。多くの優秀な同志が戦列から離れてゆくという苦しみを味わって来た。今、革命戦争の開始のなかで、これらの論争は従来の一見恣意的な性格をぬぐいさりながら、革命戦争の烈火にしっかりと足をふみしめて、正しい方向へ進もうとしている。革命戦争の開始と定着、発展こそ、戦略、綱領論争が何ら恣意的、主観的でなく、客観的な正しさをもちうるためのルールであり、革命戦争のルールの上ののってこそ、党―軍―革命戦線と諸党派と人民という列車は正しい軌道にのって横道にそれないで前進することができる。このルールは今敷かれたばかりであり、現実の

リラ、都市ゲリラの戦士たち、パレスチナ解放の戦士たち、アメリカのゲリラ、そして、アメリカのウェザーマンやブラックパンサー、アイルランド共和国軍、スペイン、ポルトガルのゲリラ、そして、中国や朝鮮、キューバの武装人民は、全て我々の戦友であり、盟友である。彼らも、われわれも全て、世界革命戦争を闘う世界赤軍の兵士として手をつなぎつつある。

一九五八年日本に於て、共産主義者同盟が、レーニン主義の復活をかがけて誕生して以来、日本新左翼は世界革命の旗印をおろしたことはなかった。しかしこの十数年の間に、何千回、何万回と叫ばれた世界革命の言葉よりも、69年以降の蜂起、革命戦争の中での一発の爆弾は、それこそ自然に、世界の革命的人民とわれわれを結びつけてくれたのである。ハイジャックの9名の赤軍兵士たち。キューバやパレスチナでの交流と結合。これらはすべて革命戦争という土台に支えられて、より大きな団結の力を発揮している。

何千、何万回の言葉よりも一回の武装行動を！

明らかに日本のわれわれは、世界の革命戦争から非常に多くの、貴重な経験を学ばなければならぬ。このことを認めない党派や人々は、世界を逆立ちして見ているのである。「先進国革命主義」は否定されなければならない。そのことを認めた上で、尚かつ、日本人民の担わなければならない巨大な歴史的任務を自覚することである。われわれは、さらびやかな言葉に惑わされないで、こ

闘いの困難さの前に、破壊されてしまうかもしれない。それが闘いの厳しさである。だからこそ、われわれはこのルールをどんなことがあっても守りぬかばならない。

このルールをしっかりと守っているかぎり、われわれは、これからも無数に犯すかもしれない様々な誤り（それは必然でさえある。誤りを恐れてはならない。問題は誤りを誤りとして直視することができざる環をしっかりとつかんでいるかどうかである。）をただすことができるだろう。

今、ようやくルールが敷かれたばかりであり、党内闘争―党派闘争は決着がついたのではなく、これから始まるうとしているだけにすぎない。何事も始めが困難である。

われわれはこの作業を立派にやりきる決意を固めよう。

① 花園論文（自由への道）について

『自由への道―前段階蜂起の総括』（構造12月号）における花園同志の総括はきわめて明快である。「安保決戦を前段階蜂起として貫徹し、世界革命戦争を開始せよ」という赤軍派の政治（軍事）路線は、平和的大衆闘争路線と武装大衆闘争路線（革命戦争路線）とがからみあった、未分化な路線である。ここに敗北の秘密がある。

安保決戦―前段階蜂起は、従来の平和的大衆闘争路線を極限ま

でにつめた戦術であり、その頂点に立つ路線である。他方、前段階蜂起を世界革命戦争として闘うことは、新しい階級闘争の方法。革命戦争路線を採用することである。

後者は、前者を極限まで高めることによって可能になった。だが、両者は明らかに矛盾する路線であり、分離されなければならない。即ち、平和的大衆闘争路線を清算し、革命戦争路線に転換せよ。

政治（軍事）路線の二元論は、組織路線における党と軍の二元論として表われている。従来の党組織に中央軍という新たな組織を接ぎ本したものが、赤軍派の党組織であった。中央軍は従来の党組織から訣別し、革命戦争を切り開き、自ら指導しなければならぬ。そして、軍は自ら新たな党の生成過程であることを自覚しなければならない。

花園同志の主張は以上のように要約できる。前段階蜂起路線から革命戦争路線への転換、（党）―軍から、軍―党への転換の主張である。六九年前段階蜂起の総括から導かれたこの結論は、それ自体として全く正しい。花園論文の意義は、これまでの論争が一体何を論争しているのか、いかなる路線といかなる路線が闘っているのかを明らかにしたことである。

われわれは、花園論文を正しく受けとめ、ここから出発する。その上で、なおかつ、花園論文では語られていない点、不十分な点を指摘し、戦略、綱領論争として高める必要があるだろう。

② 革命戦争路線と蜂起路線

この間、花園同志などの獄中同志の論争を一方の軸として、日共革命左派、ブント連合派なども含めて展開されてきた戦略論争の総括の視点を、我々は次のように設定する。

即ち、戦略―政治軍事路線上の論争に於ては、革命戦争路線（武装大衆闘争路線）と平和的大衆運動路線の二つがあるだけであり、中間はない。全ゆる論争は、この二つの路線の闘いである。後者には、社共の議会主義路線があり、蜂起路線もこの路線の一つである。議会主義路線の反革命的な犯罪性は言うまでもない。ソヴェト運動路線は、過渡期世界が世界革命戦争の時代であることを認めず、古典的ロシア革命のイメージを直接あてはめることによってレーニン主義を石女（うまずめ）化し、又、69年「安保決戦」敗北以降は、ますます社共議会主義―人民戦線派の左翼的補完物に転落し、大衆闘争の桎梏に転化してきている。

蜂起路線は、ソヴェト運動路線の一変種である。それは二つの顔をもっている。現在、あるいは近い将来のこととして蜂起を語る時、それはレーニンの言うような意味での革命的危機（全國民的危機）を前提にしないから、革命的敗北主義―玉碎主義という顔をもつ。速い将来での蜂起を一般的に語り、それだけが自己目的化されるとき、必然的に待機主義、日和見主義の顔に変わる。

命戦争路線を主張するからと言って、蜂起を否定しているわけではないことは前もって断わっておく。（後述）

③ 蜂起の主張の眞の正体は何か

まず第一に、蜂起かゲリラか、という二者択一的な形で問題が立てられてはならない、それは問題の立て方、出发点そのものが誤っている。この様な問題は、論争でけりがつくものではなく、きわめて経験的な命題である。唯、実践的经验のみが判断を下すことが出来るであらう。それは、軍事科学の本質である。現在のわれわれには、これを決着づけるだけの実践的经验の蓄積が欠けている。これを何かわかりきったもの、自明の理としてかたづけられるものは、観念論者である。蜂起を主張する人がほとんど陥る罠であり、間違いない日和見主義、待機主義に転落する。さらに、権力奪取としての蜂起を主張するとしても、ゲリラを否定することはできない。実際、今日では少なくとも蜂起を口にする党派は、たとえ口さきだけであっても、ゲリラを否定しはしない。しかし、それはたいはいは単なる大衆むけの飾りかおまけでしかない。現実には何らゲリラを展開できないのである。

第二に、ゲリラを主張するとしても蜂起を否定しきることは不可能である。党―軍の意図と無関係に大衆蜂起が起る可能性は否定しきれないし、また、党―軍が蜂起を意識的に指導して成功す

八派・革マルのソヴェト運動路線がそれであり（だから蜂起路線もソヴェト運動路線の一形態なのである）、ブント連合派の蜂起の主張もこの意味では同じである。ただ、たとえ口先だけでも武装闘争を言うかどうかの違いにすぎない。（ブント連合派が武装闘争を展開していない現在、少なくともこのように言わざるを得ない。）

前段階蜂起路線は、花園同志も指摘するように、実質的には革命戦争路線に片足ふみこんでいながら、まだ全体としては、平和的大衆闘争路線の枠内で、それを極限までつめたものでしかなかったという、中途半端性をもっていたのである。それは、69年安保決戦の高場という条件に規定された歴史的意義と限界をもつものである。革命戦争に片足ふみこんでいた―否、片足しかふみこんでいなかった、と言う方がより正確だが―というのは、味方を保存して敵権力を粉砕する長期の革命戦争を闘うという路線を意識的に採用することができず、平和的大衆運動路線の極限的戦術である革命的敗北主義をもって闘おうとし、当然にも玉碎主義に陥って革命戦争そのものを放棄せざるを得ない地平にまで追い込んでしまったからである。

以上のことから、戦略―路線上の論争に関しては、平和的大衆運動路線と革命戦争路線との闘いに他ならず、これ以外の路線はあり得ないことが理解できる。我々は、旧来の平和的大衆運動路線を清算し、革命戦争路線に転換しなければならぬ。なお、革

るチャンスがないとも言えない。

しかし、これらは余り重要なことではない。ただ、ゲリラを主張する場合は、蜂起も一過程として撰せられ得るし、蜂起の性格をとらえることは確かである。

第三に、将来の問題としての蜂起（権力奪取）を一般的に語ることは、現在の実践環Ⅱ組織環をあいまいにする。「蜂起からすべてが始まるとすることは、逆に蜂起までは何もない（もちろん諸活動はあるだろうが…）。かくて蜂起は無期延期の浮目にしたたされ、内戦はついに開始されず……。従って蜂起を主張することは現在、日和見主義の一翼を担うことであり犯罪的ですらあるだろう。」この言葉を残して、山野辺同志は下獄している。（『獄中通信No.7』3月1日）

日向派の叛軍闘争、ソヴェト型組織建設という公然たる日和見主義は諷外としても、連合派の蜂起の非公然党、細胞建設の主張もこのような性格をもっている。「帝國主義國心臓部の革命が、ゲリラ・解放区一般ではないが故に、細胞―地区党（蜂起の軍隊）が必要である」（戦旗二四五号）

第四に、将来の問題としてではなく、現在の、或いは近い将来（72年とか）の問題としての蜂起を主張するとき、必然的に革命的敗北主義（権力奪取ではない中枢突破としての蜂起、もしくは機動隊センテツとしての蜂起）に陥るだろう。大菩薩の敗北、70年前段階武装蜂起の挫折が教えるところである。

「蜂起派は右翼にある時は日和見主義という犯罪を犯し、左翼にある時は革命的敗北主義という犯罪を犯す」(『獄中通信』7)との若宮同志の指摘は、けたし至言である。

69年前段階蜂起は、安保決戦の高揚を背景に臨時革命政府樹立という権力闘争として提起され、従って革命的敗北主義戦術は革命的敗北となりえた。前段階蜂起路線は、それを媒介にすることによって革命戦争路線に転換することを可能としたという意味で、日本階級闘争に不滅の意義を刻みつけている。だが69年前段階蜂起の技術主義的総括(蜂起の軍隊、国際根拠地、国際地下組織)から導き出された70年前段階蜂起論は権力問題をぬきざられた蜂起であり、同じ失敗をくり返すことによって革命的敗北主義にもなり得ず、中途挫折してしまっただけである。

④ 蜂起は敵軍の解体を前提とする

前段階蜂起のような戦術的概念としての蜂起ではなく、権力奪取としての蜂起が勝利するためには、どのような条件が必要だろうか。

権力奪取としての蜂起の政治的目標は、敵の意志を粉碎し、味方の意志をおしつけ、味方の意志に従わせることであり、軍事的目标は、したがって、敵を武装解除し味方は武装解除されないことである。敵の権力実体(国家権力の実体)は、主要には軍隊(

警察も含む)であるから、当然敵軍隊を武装解除しなければならぬ。政府要人や敵指導者の逮捕、権力中枢機構の占拠等は、敵の武装解除(敵軍せん滅)の結果である。たとえ、要人逮捕や中枢占拠が先行したとしても、敵軍を武装解除しない限り、その維持は不可能であるから、結局は同じことである。

それ故、蜂起は、敵軍の武装解除を遂行し、ブルジョア国家権力を粉碎しなければならぬ。しかし、速決戦としての蜂起は一挙に敵軍を武装解除し、せん滅することは不可能であるから、敵軍のせん滅はほとんどの場合、蜂起後の内戦の過程の任務として残される。敵軍せん滅という場合、現に存在する敵軍だけでなく、戦争の進行につれて増量される敵軍も含んだ概念である。だから蜂起は、少くとも、敵・味方の力関係を、味方に有利にかえることが主眼とならざるを得ない。戦争の段階でいえば、一挙に戦略的対峙―反攻の段階に突入できなければならぬ。

そのためには、客観的条件として何が必要か? 敵軍が解体して、大部分がプロレタリアートの陣営に移行していることである。主体の側からいえば、敵軍を味方の側に獲得することが最大の重点になる。

トロツキーは、革命の準備過程において、「明らかにわれわれは、依然として支配階級の諸力(警察・軍隊)に対抗して立っている。この時点での革命党の軍事活動の十分の九までは、敵軍を解体し、内部的に混乱させることであり、革命のために力を結集

し準備するのは十分の一にすぎない。」(内乱の諸問題)

通常、蜂起は敵軍に十分対抗しうるだけの革命軍をもちえず、敵は多いが戦闘能力の劣る武装集団しかもちえないのであるから、敵軍の解体、味方への獲得が根本的条件となるのは当然である。では、敵軍の解体を可能とするような条件は何か?

パリ・コミューンにおいては、普仏戦争の敗北によって国民軍の解体、住民の武装がなされ、ブルジョア権力が打倒された。この史上初のプロ独権力は、だが、レーニン、トロツキーが批判するように、中央集権的な正規軍を組織して、ヴェルサイユに進軍し、ティエール軍を撃滅しようとはしなかったが故に、守勢にまわって敗北した。

十七年のロシア二月革命は、ドイツ軍への敗北によって軍隊の疲弊が高まり、實質的にツァーリの軍隊は解散していった。十月革命の場合も、二月革命で成功した労兵ソグイエトにおけるボルシェヴィキの多数派獲得によって軍隊を味方に獲得した。

十八年ドイツ革命はキール軍港水兵暴動から始まり、軍隊が革命の主役であった。

他方、敗北した蜂起を見るならば、一八四八年六月パリ蜂起、ブランキの数回にわたる蜂起、一九〇五年モスクワ蜂起、十九年、二三年のドイツ革命等、軍隊が解体しないで、味方に獲得できた、いことよって敗北している。

以上のことから、蜂起の勝利の根本条件は敵軍の内部解体、味

方への獲得であり、そのためには敗戦による危機等の条件が必要である。

過渡期世界の今日、敗戦などによる危機(レーニンのいわゆる革命的危機)を待機するのは、あどけない願望というべきである。敗戦等による危機を期待できない(それを期待するのは革命への裏切りを意味する。)とすると軍隊が内部解体するような条件を自ら作り出すか、外から解体するしかない。

軍隊が内部解体するのを大衆運動―叛軍闘争によって表現しようとするのが八派であり、日向派である。全く何と人の好いことか!

今日、敵軍は国際反革命軍として組織され、自然発生的な内部解体がますます困難になってきている。(米軍は徴兵制から完全志願制にきりかえようとしている。)それだけ、戦争が絶対的形態に近づいてきたのである。ロシア革命でさえ、蜂起の後の、内戦の過程では敵軍の内部解体、わがえり工作は次第にその余地が少なくなっていた。(後の点は歴史的にも考察されねばならない。)革命戦争路線を採る時、長期の革命戦争の過程で、敵軍の内部解体が進行するならば、蜂起の勝利の条件が形成されるし、また蜂起を経ないで敵軍をせん滅することが可能となる。

現代では、蜂起を主張するとしても、蜂起の客観的条件としての敵軍の内部解体を可能にするためには、蜂起の前のかなり長期にわたる革命戦争の展開が不可欠と言える。

それ故、蜂起一般を主張して、蜂起の前と蜂起後の革命戦争を語らないものは、決して蜂起を實現できないし、最大の日和見主義とよばれてもしかたがない。

なお、(最後の全人民的総蜂起を除いて)蜂起は、必ずしも確実な勝利を約束するものでなく、いちかばちかのバクチのようなものである。蜂起において、時期の設定が重要ポイントをなしていることはそのことをものかたっている。(例えばロシア革命の場合、レーニンは○日では早すぎるが○日では遅すぎると言って、二・三日の中で蜂起の日時を限定している。)

⑤ 都市ゲリラについて

帝国主義国における革命戦略(一國主義的なものではないが：後述)を構築する上での問題は、後進国における農村解放区や山岳ゲリラを通じた量的発展(ゲリラ戦から正規戦への移行)と同様には考えられない、という点である。現在までの経験では、都市においては、分散した小人数のグループによる奇襲戦(都市ゲリラ)をいくら積みかさねても、それが、機動的な大部隊(正規軍)による正規戦へ移行することは想定しがたい。フランスレジスタンスや、イタリアバルチザン、アルジェリア解放戦争、更に中南米、北米での都市ゲリラ戦の展開という現在までの経験では、この常識は打ち破られていない。

一ヶ所にとどまるとすれば、敵の包围を受けてせん滅されるからである。ゲリラは、決して一ヶ所にとどまることがなく、一切の危機をさけて、初期の目的を達成するか、達成できなくても、いつでも完全に撤退できるようにしておかねばならない。

もちろん、中国やキューバ、ベトナムなどの経験でも、解放区(根拠地)と遊撃区は空間的に固定的なものではなく柔軟性もっている。特にベトナムでは、昼は政府軍が支配するといったように、時間的に解放区が移動するといった経験がある。それ故、解放区(根拠地)は、党一軍の組織する人民だということもできるが、正規戦に於ては、やはり空間的、地域的な解放区(必ずしも固定してはいないにしても)が必要である。特に帝国主義国では、決定的な力関係の変化があるまでは公然たる地域的な解放区の形成は不可能であり、それ故、徐々に解放区を拡大してゆくという方法は採用できない。

第三に、だが、敵軍の武装解除(せん滅)は、機動的な大部隊(正規軍)によるせん滅戦によってのみ可能であり、機動的な大部隊の存在は必然的に一定の制庄地区、支配地区を生み出すし、またそれがなければ作戦行動不可能である。大部隊を維持する兵站線、補給戦が必要だからである。そして、機動的な大部隊による作戦が一旦開始されたならば、それは最後の勝利まで攻撃の手をゆるめてはならないはずである。機動的な大部隊がたとえば機動隊をせん滅して、後撤退し、散開するなどということは、自ら

マリゲトラも「決定的な闘争が組織される戦略的地域は農村である。しかし、都市においては、戦術的な闘争を發展させることしかできない。」と述べて、ゲリラの分散性、各グループ間の秘密性を強調し、決定的段階に達するまでは決定的な闘争を行なうことを、自殺行為であるとして厳しく斥けている。フランス、イタリアの場合、連合軍の進軍と呼応した形で蜂起が決定され、ポランドの場合、ソ連軍の進軍が遅れてワルシャワ蜂起は血の海におぼれた。この点では、山岳ゲリラや農村ゲリラの条件が皆無でO.E.A.S.決議で「武装闘争の条件がない」とさえいわれたウルグアイに於いて、ツバマロスが都市ゲリラを發展させ、都市ゲリラによる革命戦争の勝利さえ示唆している(『査証』一号参照)。

それ故、将来的には都市ゲリラによる勝利も可能性としてはひらけているが、未だ現実的ではない。今後の実践的経験の蓄積が判断してくれるだろう。

そこで、現在までの経験を総括してみなければならぬ。

第一に、帝国主義に於る都市ゲリラ、革命戦争は、現実的に可能であり、この可能性を否定するのは全くの日和見主義であり、敗北主義である。

だが、第二に、ゲリラが徐々に制庄地域(解放区)を拡大してゆき、そこから正規戦に移行するというような段階的発展も想定し難い。何故なら、帝国主義国においては、敵の交通、通信網、軍事、警察網が全国網の目のように張られていて、ゲリラがもし

武装解除するようなものである。それは、ゲリラ戦を否定することではなく、又、敵を引きつけるために退却することを否定することでもない。だが、一旦作戦行動が開始されれば自ら解体することは許されない。しかも敵正規軍と匹敵しうるだけの戦闘力をもった機動的な大部隊が突然に登場することは全くの夢物語であり、それ以前の長期の戦争(実戦)によって鍛えられていない軍など使えないならぬだろう。(軍隊の解体、寝がえりを手件とした全人民的武装蜂起の場合は別の位相である。)

戦術的闘争としての都市ゲリラの發展と限界をいかに克服するか、ここに蜂起という問題が登場する。尚、中南米の都市ゲリラ(ブラジルN.L.A.・V.P.R.・ウルグアイ・ツバマロス。グアテマラP.A.R.等)、特にマリゲトラについてふれておく必要がある。彼の場合、ブラジル革命の戦術的特殊性から出発し、ラテンアメリカ大陸革命戦略という性格をもっている。

(イ)ブラジルにおいては、米帝と軍部独裁政権の軍隊は、海岸線に多い都市を包围する戦略的配置をして国境の隣接する内陸部(農村地域)と都市を分断している。したがって、農村、山岳から都市へ攻めのぼる戦略をとるゲリラ戦争にとっては、補給路を断たれていると同時に、米帝と各国軍部独裁政権の対ゲリラ共同戦線によって、山岳ゲリラや農村ゲリラが十分成長しない芽のうち摘みとられてしまう危険性が大きい。(ゲバラの戦死)。こうして、都市ゲリラは農村ゲリラの補給基地の役割をひきうける

とともに、陽動作戦によって軍を釘付けにし農村ゲリラへの弾圧の集中を阻止し、農村ゲリラを成長させなければならない。

(ロ)そのためには都市ゲリラで鍛えられた戦士が農村ゲリラ下の地下組織を作り、その中核となること。

この都市ゲリラと農村ゲリラを基礎に民族解放軍による正規戦に移行する、即ち、都市ゲリラ→農村ゲリラ→民族解放軍による正規戦というのが革命戦争の発展段階である。

以上のことから、マリゲラの戦略を帝国主義国日本に直接あてはめる事はできない。何よりも、戦略的闘争を遂行する地域は農村ではなくて、都市であり、都市プロレタリアートに依拠しなければならぬからである。ここから特殊の問題として蜂起が考察されねばならない。だが、マリゲラからわれわれはまだ多くのことを学ばねばならない。このことを否定するのは、革命を放棄する者だけである。

マリゲラにおいて、特に注目すべきことは、都市ゲリラ開始の頃には、各グループ間の結合よりも分離が強調されていた(『独立戦闘団』)の対し、農村ゲリラの開始された頃には、全国の統一司令部の問題に言及していることである。これらの教訓を無批判的にあてはめることなく、実践の中で取捨選択し開発してゆかねばならない。

衆闘争に到達したまさにその時、我々の全く知らない地点で、我々と同じ星をみつめて、階級闘争砂漠を前進していた人々があらわれた。孤独な血も凍りつくような革命の道を耐え抜いて歩き続けていた時、この出会いはおこったのだ。何という歴史的法則のすばらしさだろう。」(獄中通信No.7)と獄中同志は指摘して、その内容はすなわち「我々の合流点は」は「一方の前段階蜂起(大衆実力闘争の最高形態)の挫折の総括、他方の政治ゲリラ闘争の総括によるゲリラ戦争の地点である」(同上)としている。

革命戦争と蜂起について、日共軍事路線は次のように言っている。「わが国の武装闘争の形態は一般的にあって、労働者階級のゼネスト(武装蜂起)と農民の武装自衛闘争と農村及び都市に於けるバルチザン闘争の統一した形をとることによって成功する。」(世界革命運動情報)六全協の転換によって、この戦略は深められなかったとは言え、我々は尚、多くの教訓を引きだし、学ぶことが必要である。

さて革命戦争路線とは何か、という事から始めよう。

(イ)全ゆる戦争・戦闘は、敵戦闘力の撃滅、即ち、自分は武装解除されず、敵を武装解除することを軍事目的としている。

(ロ)この場合、戦争は異なる手段をもってする政治の継続であるから、その政治の程度によって撃滅の規模は規定される。例えば、敵の一定地域の占領が目的ならば、その地域の敵を撃滅し、占領地域を確保しさえすれば、戦争はやむ。賠償金めあての戦争も適

⑥ 革命戦争と蜂起

さて、われわれは①④においては、蜂起一般を語ることを否定し、革命戦争路線を主張してきた。⑤においては、逆に、都市ゲリラの延長上に革命戦争の勝利を想定することが出来ない限界から蜂起の問題が発生してきていることを見た。二つの結論は一見矛盾していないことがわかる。それは、革命戦争の一環としての蜂起ということである。このことを考察してみよう。

革命戦争の一環としての蜂起という概念では、若干の先駆的な経験はあるにしても(仏、伊バルチザン→蜂起……この場合は第二次大戦という条件下であった。)、全く新しい概念であり、未知の領域である。正確に言えば、五〇年代の日共の軍事路線においてこのような路線(革命戦争と蜂起・ゼネストの統一)が主張され、実質的には約一年程度実践されたことがある。しかし、この革命的な実践、貴重な経験は、六全協に於ける転換によって闇に葬られていった。今また、京浜安保の諸君がこの革命的伝統をひきついで実践しようとしていることを我々は断固として支持し、評価する。我々も今や再び日共の軍事路線を総括し、継承する作業を始めなければならない。我々と日共(革命左派)の合流は単なる偶然ではない。「日本共産党(革命左派)との歴史的な出会い(合流)は、我々が平和的大衆闘争の実力闘争の中から武装大

当な所で講和が成立するだろう。プロレタリア革命(戦争)の場合、ブルジョア国家権力を粉砕し、ブルジョアジーをせん滅しなければならぬから、論理的に言えば、戦争の窮極的な形態(絶対的戦争)をとるであろう。世界革命戦争は絶対的戦争に最も接近した戦争と言えよう。

(イ)敵権力、その支柱である常備軍のせん滅は、革命戦争(『持久戦)を通じてのみ可能である。一瞬の蜂起(『速決戦)によって、敵をせん滅することは出来ない。(例えてきたとしても、敵は又、再組織して、内戦を挑むであろうから、どちらにしても、内戦を経過しなければならぬ。)ロシア革命においてさえ、内戦干渉戦こそ革命の本舞台であり、これを通じてのみプロレタリアは、うち鍛えられた。(だかトロツキーは正規軍建設を中央集権的な常備軍ととりちがえ、バルチザン闘争の貴重な経験を洗い流し、赤豆変質ブルジョア軍隊の根拠を残した。この意味でロシア内戦は人民の戦争ではなく、ブルジョアの戦争(常備軍と常備軍による正規戦―物量戦)を越えることができなかった)であり、赤軍は世界革命の理念をもつ労働者国家の階級軍隊という点のみブルジョア軍隊と区別される軍隊であり、赤軍の変質はいわば必然的でもあった。)

世界革命戦争の今日では、勿論先進国、後進国を問わず、内戦は国際的内戦と同じであり、はじめからそのような性格を帯びている。

いずれにせよ、長期の内戦を経てのみ、敵権力をセン滅することができ、また、人民の戦争―人民の軍隊という構造を現実化することができ、この過程をぬぎにした場合は、ブルジョア軍隊への変質を免れえないう。蜂起路線ではなく、革命戦争路線を主張するのは、根本的にはこの主体的条件、プロレタリア独裁権力の成長発展が不可欠だからである。単に勝つためだけのものではない。

(二) 一時的な権力奪取としての蜂起は、即決戦の陣型であり、点的な概念であるのに対して、革命戦争は持久戦の陣型であり、長期の過程を経た敵権力粉砕―革命権力樹立という性格をもった、線的面の概念である。

革命戦争が開始され、持続し、発展する時、それは二つの権力間の闘争―戦争（即ち、二重権力状態―権力闘争）以外の何物でもない。したがって、革命戦争を本質的な側面から考察するならば、それはプロレタリア革命権力の成長、発展の過程である（勿論、勝利すればの話だが）。ただ両軍の力関係が戦略的防禦段階では敵が有利で、味方が不利（守勢ではない）、戦略的対峙段階では、依然として敵が有利ではあるが味方はもはや粉砕されないうで均衡していること、戦略的反抗段階では、味方が有利で敵が不利になり、敵をせん滅する段階である。このように、それぞれの段階によって性格を異にするとはいえず、革命戦争が革命権力の生成発展過程以外の何ものでもないと言ふことは、何を意味して

たせることである。この意味でも、革命戦争は恒常的な政治闘争（権力闘争）といふことができる。大衆の恒常的な武装を組織し、党―軍と結合させること、全ゆる兵站活動（革命税の徴収、武器、アジトの提供など）も新たな権力の組織化とこの下への結集として理解させることである。

当然、革命戦争の中で形成される統一戦線もどのような権力を組織するのかという点をめぐる党派闘争という性格を持たなければならぬ。革命戦争の規律に従った批判と自己批判が貫徹されなければならぬ。すなわち、党派闘争自体が権力闘争という性格をもつこと、逆に権力闘争は党派闘争に媒介されなければならぬこと、こうして党内闘争―党派闘争―権力闘争の一体化という構造を実現するのである。（綱領問題が党派闘争の基軸になるというのは、革命戦争の基礎の上では党派闘争自体が性格を変えることを意味している。従って革命戦争から離れた綱領論争なるものは、総にかいたもちにすぎない。益よりも害ばかりである。）

(三) 蜂起を戦争（内戦）の全過程から位置づけるならば、それは一挙に対峙段階か、もしくは、反攻段階を開始するという性格をもっている。この場合、蜂起以前に長期の合法闘争が存在するか、或は長期の革命戦争が継続されているかによって違ってくる。

前の場合には、敵軍が内部解体し、大半が寝がえることが決定的な条件であることは既に述べておいた。敵軍の解体、反乱とゼネスト生産管理、人民の武装が結合する時、蜂起は巨大な爆発力

いるのか。それは次の二つの事を意味する。

第一に、革命戦争を開く党―軍（いかにちっけけなものではあれ）は、自ら革命権力として行動を首尾一貫させることである。全ゆる微発活動、要人逮捕や書類の押収、敵軍攻撃など、これらの行動一切は自らの権力（武力）を行使するという意味をもっている。

敵権力が税金を徴収し、人民を逮捕攻撃する力をもつのと同じく革命権力の行動も一面ではこのような権力の行使である。

ツバマロスは、要人逮捕、微発活動、敵軍攻撃などをこのような権力の行使として一貫させている。

マリゲータも微発活動においてEOR（革命微発税の領収証）の発行を重視しているが、キューバ革命の場合にも同様のものを発行し革命後に支払うようにしている。このような革命権力としての首尾一貫した行動は、人民の眼に二つの権力間の戦争として映じさせ、これを通じて人民の敵味方への分解と党―軍と人民との新たな団結を形成することを助けるだろう。もちろん、決定的な力関係の変化があるまでは革命権力という性格も限界があることを否定するものではない。

第二に、党―軍はどのような権力をうち建てようとしているのかを大衆に理解させ、一切の諸党派と大衆をこの権力に組織する闘争に組織して行かねばならない。

即ち、大衆のいかなる闘争も権力闘争としての首尾一貫性をもを發揮するが、このためには、客観的諸条件（敗戦などによる危機）がなければならぬ。ロシア革命は、この客観的條件と主体的條件が結合した稀有な例であった。

客観的條件なくして、蜂起は出来ない。あえて蜂起するとすれば革命的敗北主義の道しかないであろう。今日、このような客観的諸条件―危機を期待することは誤りであることも先述しておいた。

さて、このような巨大な爆発力を有する蜂起も、主体的客観的條件を兼ね備えた場合でさえ、長期の合法闘争の後では多かれ少なかれ受動的な性格を免れ得ない。ロシア革命がそうであった。従って長期の合法闘争を通じた大衆の教育と組織化を経て蜂起という道はわれわれの進んではならない道である。

今日の事態の中では必然的に待機主義―ソウィエト運動主義に転落してしまうのである。

(四) 長期の革命戦争を経た蜂起、更に総反攻という道はどうであるか。

長期の革命戦争のなかで鍛えられ発展してきた正規軍と、それと結合した人民の自衛武装の進行、党―軍と人民との協力、結合関係の発展が蜂起の主体的条件（蜂起実現力）である。

他方、この過程では敵軍は極限まで攻撃を強めざるを得ないが故に、人民の間のみならず軍隊内により大きな亀裂を生じさせることになろう。たとえ蜂起の客観的條件たる敵軍の解体、わがえ

りが大規模に進んでいないとしても、革命の正規軍の成長という主体的条件はこれを補い得るし、又、蜂起によって潜在的な亀裂が表面に現われる可能性もある。要するに長期の革命戦争は蜂起の主体的客観的条件を自ら作り出し、ひきよせて行くことを可能とする。それ故にこの場合の蜂起は、本来の蜂起の受動性を克服し、主導性をもった蜂起として遂行されることができ得るであろう。そして蜂起による力関係の変化を基軸にして、革命戦争は一挙に反攻に転ずることが可能になる。こうしてわれわれが蜂起を主張する場合でも、革命戦争の一環としての一段階としての蜂起でなければならぬ。この蜂起の場合でもゲリラ戦は主要ではなくとも依然として重要な役割を演ずることは銘記しておかねばならぬ。

(ト) 大衆が、党一軍の意図や統制をこえて、ゼネスト一蜂起に突入することも必ずしもないとは言えない。その時には、党一軍は大衆の蜂起に最大限の組織性と計画性を与え、犠牲を最小限におさえて無謀な作戦をさせないこと、こうしてゼネスト、蜂起、ゲリラ戦正規戦を有機的に結びつけなければならぬ。ただ、これはあくまでも将来の可能性によって、現在の自分の手を縛ることは自殺行為である。

(チ) 内戦と国際的内戦の関係についてふれておく必要がある。

本格的な内戦の開始以前に国際反革命の介入があるかどうか、あるいは労働者国家の参戦についてはどうか等々の問題は予測すべからずである。他方経済主義は、組合運動のなかから発生した傾向であり、これら両者との党派闘争を、全国政治新聞を媒介にした非法党建設、蜂起の党建設に集約したものである。

レーニンのテロリズム批判はこのような歴史的総体のなかでみなければならぬ。これを現代に教条的にあてはめ、テロリズム批判として一般化するのには誤りであるところか自分の日和見主義のかくれみのでしかない。敵軍のせん滅という戦略目標から離れたテロをテロリズムというのである。

III 世界革命戦争の歴史的総括

はじめに

「第一に、マルクス主義は、運動を何か一つの特定の戦争形態にしぼりつけない点で、全ての原始的な形態の社会主義と違ふ、マルクス主義は、多種多様な闘争形態を認めるものであるが、その際、それらの形態を『思いつく』のではなく、運動の過程で自ら生じる、革命的諸階級の闘争形態を普遍化し、組織化し、それに意識性を与えたにすぎない。全ゆる抽象的な公式、全ゆる空論的な処方箋に、無条件に反対するマルクス主義は、進行中の大衆闘争一それは運動の発展、大衆の自覚の成長、経済的および政治的危機の激化に伴って、絶えず新しく、ますます多様な防禦と攻

ることはできない。ただ、革命戦争の対象は明白に国際反革命軍一安保軍であり、当初からこれとの戦闘として展開しなければならぬ。労働者国家の参戦も、基本的には自らの力量で闘うことが前提であり、この前提のうえで参戦を要求すること、反対にわれわれもいかなる国の戦場にも出動できる体制を整えておくこと(軍事境界線としての国境の廃止)、これが原則である。これらの点については世界革命戦争の戦略的問題として検討しなければならぬ。

(リ) 最後にテロリズムについて

革命戦争の軍事的目的は敵を武装解除し、味方は武装解除されないことであり、このことを通じてのみ政治的目的(プロレタリア独裁権力樹立)を実現する。全ての戦闘は、この戦略的目的に従属している。挑発(兵站活動)政治犯交換の為の誘かい、建物占拠、爆破、要人テロなども、全てはこの目的に従属し、そのさまざまな活動形態にすぎない。この戦略目的から離れて、テロの衝撃や政治的効果をわらうてそれ自体が自己目的化されるとき、テロリズムと言うのである。

レーニンは、テロリズムを組合主義、経済主義の一変種とし、組合主義、経済主義が大衆の自然発生性に拜跪するのに対して、テロリズムは憤激したインテリの自然発生性に拜跪するものでしかない」と規定した。周知のように、レーニンのテロリズム批判は、ナロードニキのなから発生したロシア社会主義革命運動の自己撃の方法を生み出す一に対して注意深い態度をとることを要求する。……第二に、マルクス主義は闘争形態の問題を、必ず歴史的に考察することを要求する。具体的な歴史的情勢をよそにしてこの問題を提起することは、弁証法的唯物論の初歩を知らないことを意味する。」(レーニン『バルチザン闘争』)

我々の態度もこれ以外ではあり得ない。運動の過程で生じる闘争形態を発見し意識化すること、全ゆる闘争形態を歴史的に考察すること。我々は、蜂起とゲリラをめぐる論争をみてきた。この論争そのものが、世界革命戦争の煮つまりを示しているのであり、この問題を歴史的に考察しなければならぬ。つまり、世界革命戦争はすでに開始されている。何か、権力奪取してから革命を輸出すれば、それが世界革命戦争だと考えるのは、弁証法を理解しないものだけがいえることである。ロシア革命以降の過渡期世界は、やすむことのない革命と反革命の戦争一世界革命戦争の打倒の後も階級の廃絶一共産主義社会に至るまで続く、長期の徹底的な戦争である。我々は戦略論争の総括を前提にしたがら、この問題を歴史的に考察していかねばならない。

① 永続革命と同時革命

——貧民と市街戦の時代

一八四八年革命は、絶対主義と勃興期のブルと都市貧民の三つ

どもえの争い―歴史的にはブルジョア民主主義革命としての性格を持ちながらも、他方でブルと都市貧民との対抗関係に規定されてブルジョアと絶対主義権力との妥協の中で都市貧民が粉碎されていった。それが本質的にはプロレタリアートの未成熟の貧民としての存在に規定されていた。マルクス、エンゲルスの永続革命論は、ブルジョア民主主義革命からプロレタリア革命への永続的な転化―ブルジョア民主主義革命の中でブルジョアジーからプロレタリアートへのヘゲモニーの移行を目指したものであった。だが、ブルジョアジーの裏切り（それは絶対主義権力の近代ブルジョア国家権力としての性格変換と対応していた。従って、エンゲルスが、ブルジョアジーが絶対主義に権力を譲り渡したとするのはブルジョア国家権力の実効的把握、すなわち、ブルジョア国家ではブルジョアが実体的にも国家権力を担っているとする誤った先入観であり、一概にブルジョアジーの裏切りとは言えない。ブルジョアジーは、絶対主義権力をブルジョア国家権力に執行権力として再編することを逃して、ブルジョア民主主義革命の本質的任務、ブルジョア国家の樹立という成果を獲得していた。）と、プロレタリアートの未成熟の動搖的は何を實現すべきか自覚していないに規定されてブルジョアジーからプロレタリアートへのヘゲモニーの移行という路線は敗北する。

四十八年革命の敗北の総括は、経済学（資本論）であった。ブルジョア社会の革命的危機とは何かということであった。他方、ブルクスは規定していた。）このことによつて対応しえず、又コンミンゲンにおいても指導部として登場しえなかつた限界であり、敗北であった。パリコンミンゲンは「遂に発見されたプロレタリア独裁の政治形態」として、歴史的な意義を刻みつけたが、同時に第一インスターの敗北をも意味するものであった。

四八年革命からパリ・コンミンゲンに至る闘争過程でのプロレタリアートの闘争形態はパリケード市街戦が典型的であった。それはプロレタリアートの階級としての未成熟の貧民という性格に規定され、ブルジョア民主主義革命の一翼を担った一時代の産物であった。パリコンミンゲンに於ては戦争の敗北による国民軍の解体―プロレタリアの側への移行によつて蜂起は勝利したが、即自的な民兵を組織しただけで、正規軍を組織してベルサイユに進軍してティエール軍を撃滅しようとはせず、守勢にまわつて敗北した。

② 第二インスター（労働組合の経済闘争と議会主義）とソヴエト（ゼネストと蜂起）の時代

後期エンゲルスは革命戦術を総括して、パリケード市街戦の時代は終わった。将来の革命においては市街戦に代る戦術が現われるだろうと、予見しつつ、それには触れず、結果的に議会主義に流れていった。

ドイツ社会民主党を中心とした第二インスターは労働組合にプロ

レジョアジーはイギリスを中心にして産業資本の支配を確立し、周期的恐慌を通じてより世界的規模に発展していった。マルクスはブルジョア社会が生産力の発展の余地を残している限り、本當の革命は問題にならないとし、他方、周期的恐慌が世界恐慌としての性格を表わしつつあったのに着目して、世界恐慌―危機―ヨーロッパ同時革命という展望を打ち出した。第一インスターの結成は、この展望のもとにプロレタリアートを労働組合に組織し、プロレタリアートの原初的社会主义主義―無政府主義との党派闘争を通じてプロレタリアートの階級的成熟を勝ちとつてゆくことであった。

だがマルクス晩年は萌芽的な独占の形成を基礎にして、帝國主義段階への移行を準備しつつあった。これに規定されてヨーロッパのブルジョア民主主義革命、民族戦争は終焉し、戦争は性格を変えていった。普仏戦争の意味するものは、そのことであった。一八七一年パリ・コンミンゲンはボナパルチズムのビスマルクへの敗北に際してブルジョアジーとの対抗関係が、四八年革命のよりな様相をとらず、直接にプロレタリア権力の樹立に至つた。それは依然としてプロレタリアートの未成熟に規定されて一方で、プロシア軍への民族的な抵抗という性格をもち、他方では、ブランキズムと無政府主義と指導部をなすという限界を示していた。明らかにそれはマルクス―第一インスターが普仏戦争を民族戦争の枠内でしか扱えていなかった。（プロシアから見れば、戦争は純粹に防衛的で、ドイツ統一の達成という点で進歩的であるとマル

レタリアートを組織してプロレタリアートの成熟を促進することによつて、無政府主義やブランキズムを粉碎したがそれは、経済闘争と議会主義としての日和見主義の発生でもあった。他方ブルジョアジーは重工業独占を基礎にした金融資本の支配―帝國主義を確立しつつ植民地争奪戦にのりだしていった。こうして植民地支配の上で労働貴族をつくりだし、日和見主義を通じてプロレタリアートを支配していった。

エンゲルスが市街戦に代る戦術を予見したのを引継いでバルブスは、ゼネストと蜂起の結合を主張していた。

一九〇五年ロシア革命はバルブスの予見した政治的ゼネストと蜂起を結合した新しい戦術の現実性とその巨大な爆発力を実証した。トロツキーの一九〇五年の總括はこれを一般化し、ブルジョア民主主義革命からプロレタリア革命への連続的転化としての永続革命を主張した。他方レーニンは、マルクス永続革命論の継承としての「二つの戦術」―労働民主独裁をうちだした。それは總体としては未だ第二インスターの枠内にありながらも非法全国政治新聞を媒介とした中央集権的戦術の党―蜂起の党建設によつて端的に第一インスター、第二インスターを越えることができたのであった。一九〇五年革命は、敗北したとはいへ、ゼネスト・蜂起を組織するソヴエトの時代が始まったことを意味していた。

帝國主義は、市場再分割戦に向けて、国民的生産力を統合しつつ總力戦を担う国民皆兵を組織していった。それは労働組合の成

熟を基礎とした第二インターの日和見主義を社会排外主義として集約することを通じてのみ可能となった。第一次帝国主義戦争は総力戦としての市場再分割戦であった。それはプロレタリアートの階級的成熟の転倒された表現であり、逆に総力戦によるブルジョアジーの国民的統合力の限界をひきだし、そのことを通じて、社会排外主義の解体を結果した。こうして、レーニンのいう全能の部隊監督としての帝国主義戦争は、革命の危機を形成し、プロレタリアートの巨大な力量を開花させた。

一九一七年ロシア二月革命はドイツ軍への敗北による軍隊の解体情況と、プロレタリアートの自然発生的決起に労働兵ソヴィエトの成立に至った。レーニン・ボルシェビキは四月テーゼによる転換—ソヴィエト多数派の獲得による社会主義革命をうちだし、メンシエヴィキ、エス・エルとの党派闘争を、平和、土地、パンのスローガンによって、契約し、克の再編、赤衛軍の組織、軍隊の獲得、ソヴィエトのボルシェビキ化を組織環とした。こうして、ロシア十月革命は克、赤衛軍、ソヴィエトの蜂起によって勝利した。

③ 世界革命戦争の防禦段階の開始

(イ)第三インター・赤軍とベルサイユ体制・反革命義勇軍

問題を登場させた。これは、トロツキーの敗北とN.E.P.—共産主義の学校としての労働組合というレーニンの勝利を以って終るが、逆に、それによって、赤軍は、ソヴィエト国家防衛の軍勢力として固定化されてしまった。以降、赤軍は革命の深化、社会主義建設と分離され(ただその工業化が軍近代化の技術的基礎を提供するという点に一面化される。)その機構整備・軍近代化の中で官僚化し、階級制度を導入し、逆に官僚の支柱に転化していった。こうして、赤軍の常備軍化の危険性は現実化し、生産からも政治に人民の組織化からも分離された軍隊(世界革命の理念でしかブルジョア軍隊と区別されない。従って、スターリン支配下では、そのまますんなりと一國社会主義防衛の國防軍に転化した。)が形成されたのである。それはボルシェビキが世界革命戦争を闘う覚へと自己を再編することに失敗したことを端的に証明していた。他方、中国やヴェトナム、キューバなどの人民戦争の歴史は、正規軍—遊撃隊—民兵あるいは主力部隊—地方部隊—民兵の三結合が正しい路線であることを教えている。この場合遊撃隊は分割された正規軍から成ることもあり民兵から成ることもある。また正規軍は本質的に党の指導する軍隊であり、党の中核であり、戦争—生産—組織を一体的に遂行する任務をもち、革命の最も先進的な柱となった。

こうして、ボルシェビキは建軍に世界革命戦争を闘う党建設において敗北した。「帝国主義戦争を内乱へ」からドイツの飛火

ロシア革命の勝利は内戦と帝国主義の反革命干渉戦を引きだし、そのことを通じて、世界革命戦争が開始されたことを告げていた。だがそれは、党—赤衛軍—ソヴィエトという陣型の限界をつきだすものであり、ボルシェビキは世界革命戦争を指導する第三インター—世界党と党の中核としての赤軍の組織化が問われていた。その中心環が赤軍の組織化であることは明らかであった。成程、ボルシェビキはバリコンムーニオンが即自的な民兵の組織化にとどまり、正規軍を組織して、ブルジョア軍隊を追撃し得なかった。限界を越えることができた。しかし既に指摘しておいたように、赤軍の建設にあつたトロツキーは正規軍の建設を、軍隊の中央集権化に常備軍化に一面化し、バルチザンを農民軍の自己運動と批判し、貴重な経験を洗い流してしまった。確かに、トロツキーのみならず、ボルシェビキは、常備軍を全人民の武装に変えることを、綱領的課題としていたし、内戦、干渉戦の終結とともに赤軍を民兵制に移行させることは当然とされていた。だがそれは単なる理想にとどまり、赤軍の常備軍化—ブルジョア軍隊化の根拠を残した。それは赤軍をソヴィエト国家の軍勢力として、国家から規定してゆく発想、それ故、党と軍の二元論(赤軍内での党—コミッサールと軍—将校との二元論、総体としての党の指導ではなく、国家の指導に集約された)と切りはなせない。

内戦の終結にともなう軍事から経済建設への重点の移行は、赤軍の労働軍への転化と他方での労働組合論争—労働の軍隊化という革命論として提出された世界革命の展望もこの敗北の上にあつた限りで、一連主義的なソヴィエト革命論としての限界を持たざるを得なかつた。ドイツ革命との結合にドイツの工業力との結合がロシアの社会主義建設にとって不可欠であると考えた消極性は一方でドイツ革命との結合に依る短期決戦に期待をかけ、その期待が破られるやN.E.P.に後退するという形で現われ、他方では、国内社会主義建設を行政的手段によって強行するという官僚主義的方向として現われた。

明らかに、ロシア革命に第三インターの結成は、ドイツに対する英仏の市場再分割としてのベルサイユ体制を同時に国際反革命として登場させ新たな情勢を切り開いていたのである。それは単に第三インターからの党の分離とそのソヴィエトの多数派の獲得を通じて蜂起に権力奪取としてのロシア革命の教訓を一面的に適用することによってはのりきれなかつた。ここでも矢張、軍隊をめぐる問題に軸が移っていた。

ドイツ、イタリアにおいても革命の始まりは帝国主義軍隊の崩壊と一体化であった。そしてこの崩壊の上で階級的激突は軍隊の問題を登場させた。ブルジョアジーを中心とする反革命勢力は反革命義勇軍を組織した。ドイツではノスケがフライコールを組織し、社民政府下での國防軍の再建も純粹に内乱に対処するための反革命軍であった。もともと崩壊と危機の深かつたイタリアではファシスト戦闘団—ファシスト義勇軍、ファシスト義勇軍のロー

マ派兵→ファシストの権力掌握によるファシスト軍隊として組織された。革命の側は明らかに打ち遅れていた。ドイツでもイタリヤでも兵士は反乱を起しつつ、武装解除、逃散していったのであり、プロレタリアートの運動もゼネスト工場占拠。レーテ。工場評議会といった中で労働者の武装一般、自衛武装という地平を遂に越ええなかつた。

もちろんそれには、大戦中を通しての革命党の未成熟いいわゆる遅すぎた分離→ということが根底にあった。しかし、それ以上に、ロシア革命→世界革命戦争の開始、ドイツを中心とするヨーロッパ革命戦争の持続は反革命軍隊の登場に対する革命の軍隊の建設、両者の闘争という点に煮つまつていったということこそ確認しなければならぬ。

20年ドイツのカップ一発、国防軍のベルリン進攻、ドイツ労働総同盟のゼネストとルール労働者赤軍の蜂起、占拠は象徴的な事態であった。(このルート占拠の解除の際、共産党の全国的武装解除が導かれる。)プロレタリアートのストラトキ運動、工場占拠、レーテ、工場評議会等といった運動は、革命の軍隊建設をもつてのみ革命権力へ接近しえたであらう。プロレタリアートの自然発生的運動は、赤軍建設への基盤をなしていたのである。この建軍こそ自然的革命の高揚に対する意識性、党建設の問題があつた。この点でも第三インターは反革命に先行され、たちまちおくれたのである。

⑤ スターリン主義とファシズム

——第二次帝国主義戦争

第三インターは、ソヴェト型革命→世界的連決戦の敗北にあって、世界革命戦争を闘う党→軍の建設に挫折し、他方では国内建設に於て、「国家と革命」の一国主義、生産力主義的共産主義観の限界をさらけだし、世界革命戦争の根拠地としてロシア労働者国家を打ちきたえることに失敗する。スターリン主義は、レーニンの限界を固定化することによって世界革命戦争を放棄し、トロツキー追放・一国社会主義宣言・ソヴェトの解散・赤軍近代化→全人民武装の解体→ソヴェトを通して第三インターを実質的に解体してしまふ。(六回大会スタ・ブ綱領、一国革命、全般的危機論、経済決定論)

帝国主義は、対ソ干渉、ヨーロッパ革命戦争の解体を通じて、国際反革命を構造化し、延命した。ヴェルサイユ体制は、英仏は対独再分割でありながら、大戦中を通して、産業構造の高度化(自動車・電機等の耐久消費財を中心とした重化学工業化)をなしとげた米帝との不均衡の拡大という不安定な基礎の上にたつていた(国際通貨体制→再建金本位制)。この不安定な米の対独通貨ひきあげを契機とした世界大恐慌として発現し、再建金本位制は崩壊する。

ファシズムはこの危機からの脱出を市場再分割戦に向けたアウ

第三インターはプロレタリアートのこの運動を国際的ソヴェト運動とし、共産党による内乱→蜂起、権力奪取と設定し、かかる共産党をソヴェトの圧力によって左傾化する、第二インター左派の分離、獲得として追求した。コミンテルン二回大会は、党の役割、工場委員会及び労働組合、農業、民族、植民地問題に関するテーゼを提出したが、軍隊問題に関するテーゼは提出されなかつた。コミンテルンは基本的に二→十月の過程としてドイツ、イタリアを把えていた。(それは三回大会の統一戦線戦術においても示される。)だが事実はそうではなかつた。ロシアの二→十月ではなく、18年以降の内戦→革命戦争の国際的発展としてあつたのである。だからこそ反革命軍と革命軍を両極とする全社会的分裂過程があり、その中間に社民→労働総同盟があり、そこから分離してゆくプロレタリアのゼネスト・工場占拠。レーテ。工場評議会等は、ただ革命軍を創出し獲得することによってのみ確固たるもの、持続的なものとなりえたのである。

レーニン。コミンテルンの現実に対する立ち遅れは、赤軍のポランド進撃の敗北(赤軍のポランド進撃によって中欧の革命を切り開くという考えは明らかに十月以前のものではなく、革命戦争の思考である。しかしそれが中欧における赤軍建設の追求と結合に裏打ちされていないという一点で致命的に中途半端であり自然発生的性への賭けであつた。)イタリア・トリーノ工場占拠闘争の敗北。ドイツ三月行動の敗北として結果した。克→ソヴェト→労働組合による三分型としてのソヴェト運動→蜂起は革命戦争の現実の前に破綻した。

タルキー経済・ブロック経済と軍事支出、公共投資を軸とした統制経済・軍事経済としてヴェルサイユ体制が自ら生みだしたものであるが、同時に、第三インターへの国際国内反革命を一体化する運動としてあつた。

ここでも軍体の問題をめぐって、第三インターの立ち遅れは明らかであつた。ナチス突撃隊の抬頭→赤色戦線の壊滅→政権獲得とその下での突撃隊と国防軍との合体、改編をもつての国防軍のファシスト軍隊化である。これは十年前のイタリアの一層大規模で、ダイナミックな展開であり、社民の右からの解体であるが、それは突撃隊をテコとし、徹底的に反革命攻撃、階級軍隊への国防軍の改編として完成されたことに注目しなければならない。逆に、赤色戦線の武装は全く受動的であり、自衛的であり、経済主義的であり、特にセクト主義的であつた。そして、ファシスト軍は、イタリア・ドイツ・若干の東欧諸国からスペインのフランコ軍へと国際的に拡大し、他方プロレタリアの側では、軍隊への要求が半ば自然発生的にスペイン革命に於ける国際旅団と民兵を生みだしつつ敗北し、解体された。これへのスターリン主義の対応は、国際連盟への加入、大祖国防衛戦争としてフランス・スペイン革命を圧殺し、更に帝国主義戦争用の国内重工業化→農業集団化、クラーク一掃、血の肅正を遂行した。

こうして第二次帝国主義戦争は、市場再分割→第三インターへの国際反革命の一体化としてのファシズム軍と、米英連合軍、そ

の二環としてのソ連スターリン主義軍という二つの陣営、三つの軍隊の戦争であった。

第二次帝国主義戦争での特徴的なことは、第一次帝国主義戦争のロシアやドイツのように軍隊内の叛乱や軍隊の崩壊が最後まで起らず、武装解除は一方による他方のそれとしてののみもたらされたことである。それは、いうまでもなく、ファシスト軍隊が第一次帝国主義戦争後の革命的激闘以来、十数年を通してプロレタリアを粉砕、解体して確立してきたからに他ならない。そしてまた、この戦争を通して米軍はその国内的・国際的力量、総合力を飛躍的に強化し（イデオロギー的にも、ニューディール参加、反ファシズム→反共を通して「自由と民主主義の防衛」として）、ソ連赤軍も純粹にソ連の国家的手段、常備軍として確立し安定化した。

④ 世界革命戦争の対峙段階

① 中国革命戦争—紅軍とN A T O

—安保国際反革命体制

第三インスターのスターリン主義への解体とファシズム反革命の勝利とは相対的独自の地平を切り開いていたのは、中国共産党を頂点とする後進国革命戦争である。これらの革命戦争の持続と発

弱点（時の経過とともに致命的となった）を克服し、第二次国内革命戦争→抗日遊撃戦争→第三次国内革命戦争を通して成長し、ベトナム、朝鮮等の民族解放戦争へと拡大していった。

戦後世界は、この中国・後進国民族解放戦争の軍隊と、米軍、ソ連軍との三つの軍隊の関係として構成されたと言っても過言ではない。

ヨーロッパに於るファシスト軍制圧→崩壊過程はバルチザンを含むヨーロッパの規模で露出したが（ちようどスペインの国際隊団と民兵がヨーロッパに散開したかの如く）、それが、プロ独の正規軍⇨世界革命戦争の軍として結合し得ない未成熟は、西欧では米軍に解体・武装解除され、東欧ではソ連軍に結合され、第三の道を選んだユーゴ、ギリシヤは後者の敗北⇨前者の変質をもって終った。スペインでの敗北が第三インスターの敗北であるとすればバルチザンの武装解除、絞殺はヨーロッパ共産党の死であった。

第二次帝国主義戦争の終結であり、現在への出発点たるヤルタ体制は、米軍の世界的駐留、国際的統合力を基礎とした国際反革命同盟（N A T O、安保）と帝国主義の予防反革命⇨恐慌⇨プロパグンダ化対策としてのI M F国際通貨体制（その一環としての各国財政金融制度）を米帝一元支配体制として表現することを一方の極とし、他方の極に、スターリン主義の共同反革命、対帝国主義防衛策としてのワルシャワ条約機構を形成し、これらの両者の対抗関係（冷戦⇨平和共存）の表現であった。このヤルタ体制と中

展は第三インスターの歴史的死を告げ、新たな世界革命戦争のつまり⇨対峙段階の開始のメルクマールである。対峙段階に於ける主要な闘争形態は革命戦争（持久戦）であり、主要な組織形態は人民の軍隊（正規軍⇨遊撃隊⇨民兵）である。

中国第一次国内革命戦争は、国共合作⇨国民革命軍と都市プロレタリアートの蜂起と農民暴動をもって諸軍閥に対する反帝反封建中国統一戦争⇨北伐戦争として推進された。そして、まさにこの北伐戦争の中でプロレタリアート⇨農民とブルジョアジーとの公然たる対立が前面化し、ブルジョアジーは、反革命軍事独裁に転化し（上海クーデター）、独自の党と軍をもたなかったプロレタリアートは粉砕された。スターリン主義の国共合作（中国共産党の解体要求）と、革命軍建設の放棄の犯罪性は言うまでもない。この後、李立三⇨王明の蜂起⇨都市戦略のジグザグをくりかえしながらも、国民革命軍から分裂した朱德軍と秋収暴動のプロレタリアート⇨農民軍の結合のなから紅軍が生まれ、革命戦争の党として中共は再生した。国共内戦⇨第二次国内革命戦争の開始である。

新たに生まれた紅軍は農村根拠地を建設し、戦争、生産、組織（三大任務）を一体的に遂行する人民の軍隊であり（紅軍⇨遊撃隊⇨民兵の構造）、党⇨軍の一体化はソヴェト赤軍とは異なり、軍への党の一元的指導（政治委員、指揮員）と階級性のない軍体（民主集中制）であった。中共⇨紅軍はソヴェト赤軍の欠陥・

国内革命戦争を中心とする民族解放闘争の世界的対峙こそ、世界革命戦争の対峙段階の開始を告げるものである。

第一次帝国主義戦争の総括が、ロシア革命成立、ヨーロッパ革命敗北（第三インスター）とヴェルサイユ体制⇨ファシズムとの対抗関係であるとするならば、第二次帝国主義戦争の総括は、中国革命戦争（とベトナム、朝鮮等）とヤルタ体制（帝国主義の国際反革命⇨N A T O、安保とI M Fとワルシャワ条約）との対峙関係であると言える。

先述しておいたように、第二次帝国主義戦争では、第一次帝国主義戦争のロシア、ドイツのような軍隊の解体・反乱が最後まで起らず、連合軍による徹底的な武装解除を結果した。それは政治的には、米軍の介入による占領政策が農地改革、労働政策、財閥解体等、第一次帝国主義戦争後の戦後革命が果たした役割を先どりすることによって、プロレタリア⇨農民を米軍の下に統合し、戦後革命を未然に防いだことと対応している。唯一、中国、ベトナム戦争等の後進国革命戦争がヤルタ体制と対決した新たな段階を切り開いたのである。こうして、敵味方の強化に規定された対峙段階の闘いは、朝鮮、ベトナムに於て戦場の単一化をもちとる。

だが、この対峙段階の歴史的闘いも、依然としてスターリン主義との正面対決を避けて妥協せざるを得ない限界によって、朝鮮⇨インドシナ⇨平和共存外交に包摂されてゆく。スターリン主義の冷戦から米ソ平和共存への転換、民族解放闘争のそれへの

包摂は革命戦争主体の変質をも結果し、中共八大会一劉少奇路線一平和五原則一人民解放軍への位階制導入一軍近代化として現出する。こうして帝国主義はスターリン主義を共同反革命の一環としてくみ込み、革命戦争の一定の封じ込めに成功することによって、ヤルタ体制として自己を買徹

◎ 対峙から反攻への過渡としての現在

——大陸革命戦争と都市ゲリラ

キューバ革命戦争に始まり、インドシナ大陸革命戦争と都市ゲリラ、先進国武装闘争の開始は新たな時代の始まりを告げている。キューバ革命戦争は帝国主義の反革命包摂網を背後から突き破り、米帝の予防反革命戦略とスターリン主義の世界的抑圧の体系化をひき出し、更に中ソ論争の直接の契機となることによって、現在に至る闘いの先駆となった。

ベトナム革命戦争こそ新たな段階を本格的にきり開くものであった。ベトナム革命戦争は、インドシナ休戦一平和共存を打ち破り、帝国主義の国際反革命をより大規模な形でひき出し、自己の戦場にひきずり込むことによって、帝国主義国（反戦運動一武装闘争）、労働者国家（文革、チエコ等）、後進国（ラテン・アメリカ大陸革命戦争、都市ゲリラ、パレスチナ、アフリカ等）を問わず全世界に持続的に影響を及ぼし、戦場を拡大していった。

包摂とスターリン主義の内からの包摂によって、革命戦争一赤軍建設に無自覚な即自的なソヴェト運動派が解体される、という対峙から反攻段階への過渡期の象徴的な事態が展開された。

こうして、各国的な不均等はありながらも、帝国主義心臓部に於る史上初の革命戦争派の登場一先進国革命戦争の防禦段階の開始、が第二の、そして根本的な特徴である。

第三に、中ソ論争一中ソ対立、中国文革やチエコ、ポーランド等、労働者国家の根本的な分解が開始されたことである。

中国に於ては、劉少奇路線一軍近代化との闘いが、反右派闘争から三面紅旗の闘いの中で開始され、五九年、彭德懷解任一林彪の国防相就任一毛沢東軍路線への復帰、六五年、解放軍の位階制廃止、四つの第一確定、民兵の大々的拡充が進められ、解放軍はプロ文革命の支柱となった。社会主義教育運動に続く紅衛兵の党、国家機関の解体一党の再建と、三結合に基づく革命委員会の樹立こそは、革命戦争と社会主義建設の一体化の基礎をなしている。他方、中間地帯論のなほ崩し的な修正、羅瑞卿の抗日戦争時の持久戦をあらためた「積極防禦の戦略」に対して、林彪の「世界の農村による世界の都市の包摂」の攻撃的戦略の確立、インドシナ、朝鮮への直接的支援と反日本軍国主義闘争は、中国が世界革命戦争の根拠地化し、それに備えて、党一軍一人民の関係を再編したことを意味する。

東欧での、チエコ・ポーランド等の暴動は鎮圧されたとはいえ、

現在の事態のつまりは次のように要約できる。

第一に、対峙段階初期の中国革命戦争が、国民党、日帝を敵としてせん滅し、一国的に勝利し得たのに比べ、今日の民族解放闘争は国革反革命の肥大化をひきずり出し、そのことによって一国的な勝利ではなく、大陸規模での戦争に拡大していつている点である。一国的な力関係で考えれば、インドシナ各国（ベトナム、ラオス、カンボジア）はもはや反攻段階に突入しているにもかかわらず、国際反革命軍との戦争という意味に於て、国境をこえて拡がり、大陸規模での持久戦に転化している（インドシナ統一赤軍の形成）。ラテン・アメリカや中近東（パレスチナ）では、当初から大陸革命戦争を闘う大陸革命軍を形成しない限り、帝国主義に對抗し得ず芽のうちにつみとられてしまうこと、そして、現実に大陸革命戦争として事態が進展している。（インド亜大陸でも同じ方向）

第二に、史上一度も、革命も崩壊も経験し得ず、その国内国際的統合力を基礎としてのみ戦後世界が維持されてきた米帝本国に於て、黒人・学生武装闘争が持続し、軍隊内反乱と解体の進行、全国民的な分裂が進行している。ファシズムへの敗北以降革命運動を圧殺されてきたドイツ、スペイン等に於ても武装闘争が登場し、日、仏、伊、英等、史上初めて先進国に於る革命運動が持続的に拡大し、武装闘争が展開されている。史上空前のゼネストにもかわらず、フランス五月革命に於ては、NATO軍の戦略的

東欧全域に反ソ民族主義を持続させ、独帝との結合の下に経済建設を進める修正主義派と革命派との分裂を開始させている。ソ連の直接的しめつけの強化はこの事態をますます進行させつつソ連国内での分解を導く可能性をも秘めている。

第四に、以上の革命戦争の煮つまりは、帝国主義の国際反革命同盟の再編強化（独・日の前面化）と、帝国主義国家権力の国際反革命軍一政治警察を軸とした権力再編として進行している。そして二十年代初頭にイタリア、ドイツで始まった反革命階級軍隊化は、今、世界的規模で最後の段階を迎えている。もはや第一次世界大戦の英・仏軍や、第二次世界大戦後の米・英軍のような余裕はなくなり、存立し得なくなってきたのである。それは世界革命戦争の前進に迫いつめられ、総反抗に対処しようとするあがきである。世界革命戦争のすさまじいまでのつまりは、世界的な決着を求めて全世界いたるところに拡がり、戦場の単一化を勝ちとりつつ進んでいるのである。

③ 世界革命戦争の戦略的反攻をめざして

世界革命戦争の目的は、戦争の消滅一階級闘争の死滅一共産主義社会の実現である。その目標は、全世界帝国主義の反革命軍一スターリン主義軍隊のせん滅である。世界革命戦争は帝国主義・スターリン主義の打倒後も、一切の階級寄生の基礎そのものを解体

しつくすまで、即ち世界プロ独（その一段階としての社会主義社会）を経て、共産主義社会の実現まで続く。

現在は、戦略的対峙段階から、戦略的反抗段階への過渡である。この段階はまだ相当長期にわたるものとみておかなくてはならない。

対峙段階としての現在を概観しておこう。

味方の陣地は、中国、キューバ、ベトナム、朝鮮等の労働者国家である。ソ連、東欧は敵の陣地ではないにしても、敵に抱き込まれた陣地である。インドシナは、戦線であるが、味方に有利にかわってきており、味方の制圧地域に移行しつつある。インド亜大陸や、フィリピン、インドネシア等の東南アジア、ラテン・アメリカ、アラブ、アフリカは敵の制圧地域であるが、戦線に移りつつある。帝国主義心臓部は敵の陣地であるが、この陣地そのものは既に内部からの解体要因⇨革命戦争が成長しつつあり、これも戦線へと転化しようとしている。全世界あらゆる地域が戦場であり、互いに媒介され結合している。そこには敵と味方がいるだけである。中間はない。

戦略的反抗段階のメルクマールは帝国主義、とりわけ、米、日、独に於る本格的な内戦⇨国際的内戦の開始と考える。帝国主義国に於る革命戦争は、日、米に於てようやく始まったばかりであり、仏・独・伊等ヨーロッパに於ては未だ現実化していない。それ故、各国的には、依然として不均等性を孕みつつも、一旦いずれかの、今、相互の戦争から手をさし、握手しているのである。独自に革命戦争の煉獄をくり抜けてきた各国党一軍の結合は、第三インターの平板な結合よりむしろ緊張感を孕んだダイナミックな結合といえる。銃を握ったこともないインテリ党员的握手よりも、ごつごつした兵士の握手の方が力強いのは当然である。

だが、この各国党一軍の同質化に基づく結合は、明らかに世界革命戦争を指導する世界的司令部への統合の条件を成熟させ、要求している。それは世界革命戦争の反抗段階が一方では帝国主義心臓部の内戦の世界的同時性を不可欠としている点で、他方では、共産主義社会を組織する世界プロ独への一國プロ独の止揚を焦眉の課題としている点で、世界党一世界赤軍一世界革命戦争統一戦線の形成を要求し、同時にその条件を形成していることこそ、我々は見てとらなければならない。

(6) 最近の国際情勢の特徴

前稿で、我々は現在の国際情勢を世界革命戦争の戦略的対峙（反攻準備）から戦略的反攻への過渡期であると指摘しておいた。

その主要たるメルクマールは、インドシナ、L・A、中近東（パレスチナ）、アフリカ、インド亜大陸をまわう、世界の広大な地域での大陸革命戦争の進撃と、米・日を中心とする帝国主義国

国内戦が現実化すれば直ちに国際化し、結合せざるを得ない構造をもっている。だがいずれにしても、相当長期にわたる革命戦争を経過し、その中でうち鍛えられた党一軍を建設することが前提となる。

他方、後進国大陸革命戦争も諸々の不均等性を孕みつつも、帝国主義心臓部の内戦と結合せずしては反抗段階に突入することは不可能である。帝国主義心臓部の内戦と結合した大陸革命戦争は、言葉の真の意味で、戦場の全世界的の単一化を実現し、一挙に反抗段階に突入し得るであろう。

帝国主義心臓部の本格的な内戦は、労働者国家の根拠地化と介入を現実化するであろう。我々は無媒介に労働者国家軍の先進国進攻一参戦を叫ぶことはしない。日本の革命戦争に責任をもち得ずして、参戦を叫ぶことは何をもたらし得ない。その意味で我々は、自力更生の原則を貫く。だが、自力更生は世界革命戦争の単一司令部（世界党一世界赤軍一世界革命戦争統一戦線）の建設にそむかないし、軍事境界線としての国境の廃止一戦場の単一化を表現することを妨げない。

第三インターが世界党としての各国党を直接的に統合しつつも、世界革命戦争を指導する党へと転換し得ず、解体したあと、世界革命戦争は直接的な単一の国際司令部（世界党一世界赤軍）なしに発展してきた。世界の戦場は直接的に統合することはむしろ稀であり、各国党一軍が相対的に独自な道を歩んでくることによっ

武装闘争の開始である。そして世界革命戦争の戦略的反抗の開始のメルクマールは、帝国主義国の本格的な内戦突入である、とも指摘しておいた。

対峙から反攻への過渡期としての現在、大陸革命戦争と帝国主義国武装闘争という根本的特徴はますますあらわになってきている。最近になってパキスタン・セイロンに於て新たに戦線が切り開かれたことは喜ばしいことであり、我々の確信をますますゆるぎないものにしてくれるものである。

① パキスタンの情勢

パキスタンは従来、インドとの宗教対立が国家的対立としてあらわれ、民族矛盾、階級矛盾が宗教対立という外皮をもってあらわれていた。インド・パキスタンの宗教対立一国家対立は、明らかに英帝の植民地分割統治（分断支配）によるものである。イギリスは、インド独立運動・反英帝闘争を、ヒンズー教と回教の宗教対立を利用してかく乱し、又国民会議派の非暴力不服従運動という妥協主義を硬軟両用の弾圧を加えることによって、闘争の発展を押しとどめ、植民地支配を維持したのである。独立後、英帝が徹底的に利用し漏りたてた宗教対立はパキスタンの分離独立となって表面化し、こゝに国家間対立が固定化され、帝国主義はこの対立を利用することによって新植民地主義的支配（間接統治）

を維持している。そして、インド・パキスタンの民族ブル支配層はそれぞれ宗教的反目感を煽ることによって、国内矛盾から人民の目をそらし、階級支配を維持してきた。

だから独立後二十余年、帝国主義の新植民地主義支配と民族ブル支配層の抑圧支配はようやくして崩壊の道を歩みつつある。

インドでは、会議派の分裂とガンジー派の勝利―議会を通じた平和的社会主义(国家資本主義)が成立したが、それは階級矛盾を解決しえるのではなく、労働人民の左傾化と階級闘争の激化の触媒としての役割を果たすのみである。ベンガルに於る農民武装闘争(ナクサライト)の開始、労働者・インテリの都市での武装闘争はそのことをはっきりと示している。インドの階級対立・反帝闘争は、革命戦争の道を通る以外、最後の勝利はありえないことが増々明らかになってきているのである。

一方パキスタンは、西パキスタン軍事政権(西パキスタンブル・地主・軍部・官僚)による東パキスタン(ベンガル族)の民族的階級的抑圧が、インドとの宗教的対立によっておおいに大きされてきたのが、アユブ軍事政権打倒運動―新たな軍事政権(？)の民政移管約束―総選挙に於るアワミ連盟(東の90%獲得)―第一党(第二は西の人民党(ブット)、民族アワミ党ノ連派、中共派(バシヤン))という過程をたどって急速に矛盾が顕在化した。議会開設延期―軍事政権(ブル地主)とアワミ連盟―〇項目要求(東の自治承認要求)―アワミ連盟硬化(実質は東人民のつ

きあげ)―東の人民武装化―軍政の弾圧のための力かせぎ―奇襲的弾圧、これがその後の経過であった。

アワミ連盟はインテリ、民族ブルに基礎をおく民族政党内閣的妥協的であるが、人民のつきあげによって強硬的態度をとらざるをえなくなった。独立運動―武装闘争の初期の中心は都市の学生や商工業者の小ブル層が指導的立場にあったが、虐殺によってほぼ粉砕され、主力は、これらの残党と農民に移りしつた。初期でのゼネスト、民兵化に対し、軍事政権正規軍の意表をついた皆殺し戦争に対し、東人民は若干の正規兵(警察・ライフル連隊・学生軍)を楯に総武装蜂起―総抵抗を正規戦で戦ったが、(ベンガルデシ)、装備に優れた西正規軍には浮敗退した。こうして、独立武装闘争は、農村地帯でのゲリラ戦に移行し、この中でアワミ連盟の指導力低下、中共派の伸長という局面が現われた。

インドのベンガルのナクサライトは、速に潜入、武器援助から武闘参加まで含め、はじめて印バ人民の革命戦争での結合が実現された。パキスタンでの武闘は、直接間接にインド武装闘争を強化し、両者を増大しい地域において結合させ、そのことによって武闘を強化し、大陸革命戦争に発展せざるをえない。

パキスタン武装闘争がゲリラ戦、持久戦に移行することは、アワミ連盟、ベンガル・デシ(臨時革命政府)の自由と民主主義民族独立という政治路線(国連・米ノなどに援助を要請する中間性)と土地改革を軸とした農民の組織化、民族解放社会主義の革

命戦争派(中共派)の政治路線が対立し、後者にヘゲが移行せざるをえないことを示している。

インド・ガンジー政権(民族ブル・地主)はベンガル・デシを支持し、パキスタンに介入する動きを示しているが、解放戦争が持久戦に移行し、インド武装闘争と結合し大陸規模の革命戦争に発展することによって、逆に自らの支配をつき崩されることを恐れている、だが、これは必然である。

印バ関係は、米ソのインド支援、中国のパキスタン支持という国際関係にある。米ソはアワミ連盟の中間派がヘゲを握っている限り、対中対抗のため支持する(インド支配階級と一致)が、持久戦・ゲリラ戦に移行し、反帝民族解放社会主義の革命戦争に発展することを最大限阻止せんとし、その意味で武力介入も将来はありえないことではない。中共は内政不干渉を主張するのみで、積極的に大陸革命戦争としての発展を提起し、支援することを表面化していない。(但し、内部の中共派を通じての間接的支援の動きはある。)その意味で中共は二面政策を取っていると云える。反帝民族解放社会主義のインド亜大陸革命戦争の方向性を明白に主張すべきであり、又、その具体的支援(武器・物資)を組織すべきである。一般的に内政不干渉を主張することは、未だ平和五原則外交(その現象が国交回復、米中接近)と世界革命の根拠地化(世界の農村が都市を包囲する。)が未分化であり、中共の限界を示している。

㊦ セイロンの情勢

セイロンは全輸出の80%を占める紅茶生産の七割は英国人が占めており、英帝の新植民地主義的間接支配が貫徹している。第一に、少数民族による多数民族の抑圧支配。第二に、大土地所有制の支配(地主の農民支配―パンダラナイケも大地主である。)。第三に、自家営業、主婦を除く労働人口約三五〇万のうち、七五万の失業者の存在(失業率20%)、このうち教育恩恵化によって増大した大卒者の就職率が極端に低いこと。

これらの矛盾の累積が、自由党(民族ブル・地主)、トロッキスト、ソ連派共産党の左翼連合戦線政府(パンダラナイケ人民戦線政府)を成立させた要因である。(70年五月)だが、この人民戦線政府は、社会を通じた平和革命―社会主義政策実施を掲げつつも、地主や民族ブルなどを基盤にしていることによって徹底的な社会改革(例え国家主義的なものであっても)実施し得ず(実施すれば内戦にさらざるをえない)、公約を実現できなかった。こうして、人民戦線政府を積極的に推進し、その最大の原動力となった農民、プロ、学生、被抑圧民族の革命的左翼は人民戦線に失望し、暴力革命以外に勝利の道がないことを学び、急速に左傾化した。今回の武装闘争の中心になったチエ・ゲバラ派と総称される革命派(様々な党派を含む)は、65年以降学生、知識人、教師が中心になって組織されたと言われている。その勢力は人口千

三〇〇万人中、二、三万の革命軍が組織され、シンパを含めると十方に達すると言われている。

チエ・ゲバラ派は、四月六日夜コロンボで武装蜂起し、首相を誘拐する計画が未然に発覚したため、四月五日にコロンボ周辺警察部署を襲撃、爆破し、武器を奪取した。その後、各地で武力決起がなされ、二百ヶ所の警察が襲撃されたと言われる。

これに対し、政府は戒厳令、外出禁止令をしき、軍隊を総動員して鎮圧のりだした。この間の戦闘で、革命軍約六千が死亡し、ほぼ同数が逮捕され負傷し、約四千が投降したと発表されている。この一勢蜂起の後、革命軍は中央山岳地帯（人跡未踏のジャングル）でのゲリラ戦に転換し、中央山岳地帯への政府軍の襲撃も行われた。

政府は各国に軍事援助を要請し、ソ連は直ちにジェット戦闘機を、英帝はヘリを供与した。これはインド洋をめぐる利害関係と利権、ヘゲの確保のためであり、明白に帝国主義の利害からきている。他方、北朝鮮大使館がチエ・ゲバラ派を煽動したとの口実で強制退去させられたが、事実は明らかではない。

セイロンでもインドと同じく、長期植民地主義の支配にある後進国の矛盾の累積と人民の左傾化、その実現が人民戦線政府（ガンジー・パンダラナイケ）→革命戦争という道をたどっており、そのかぎが、民族問題、農民問題にあることは言うまでもない。又、ソ連を含む国際反革命の干渉と国際的内戦化という特徴がく

験したことのない米軍の危機、従って国内危機と、米軍の統合力を基礎にした国際反革命体制が動揺し再編されつつあることを示しており、軍規の緩和、兵士の懐柔、弾圧と志願兵制への全面移行化は、解体しつつある米軍を反革命階級軍隊化し、国際反革命の要にすえようとするこのあらわれである。

他方、ウエザーマンの武装闘争（爆破）は年間四千件にも及ぶ拡大を示しつつも、この間大衆運動にも復帰するとの声明が出されている。詳しいことは明らかではないが、それは武装闘争の堅持と大衆戦線の拡大によって革命戦争を持続し発展させる方向性として見出せる。B・P・Pをも含めて、米帝内の武装闘争は、日本武装闘争と共に、いやそれ以上に世界革命戦争の結節環である。我々にとって軍事的にも未だ彼らから遅れており、学ぶべきことは多い。

③ 国内情勢

これについては次号で詳述。

つきりとあらわれている。セイロンは、インド洋のキューバとなる可能性が大きい。第二のキューバではない。キューバと同じ道は、帝国主義とソ連の国際的予防反革命によって今日たどるところができず、当初からの、意識的であり長期の、大陸規模での革命戦争→大陸革命軍の形成の道をとること以外に勝利の道はない。そして、この道は、先進国武装闘争→本格的内戦を結節環とした世界革命戦争の戦略的反攻を準備し、必ずたどらなければならぬ道である。インド大陸革命戦争、セイロン革命戦争の開始万歳！

④ インドシナ情勢

インドシナ戦線でも、米・カイライ軍のラオス進攻をせん滅し、確実な勝利の道が切り開かれている。又、ベトナムでは、反戦米兵への攻撃停止、脱走、反乱、解放軍への参加が公然と呼びかけられ、国際主義的結合が実現されつつある。

アメリカでも、反戦運動の大衆の高揚、戦術の多様化（ゲリラ戦から平和デモまで）という局面があらわれてきた。ベトナム帰還兵の大量のデモ（現役兵を含む）や運動への参加は、ベトナムでの反乱（上官殺しの続発、命令拒否、戦闘拒否）、在日駐留米兵の反戦運動等の米軍内の反戦運動の一つの表われである。そして、米軍の解体状況の進行は、史上一度も崩壊も解体も敗北も経

IV 世界革命戦争と

世界プロ独・共産主義社会

① 「ゴータ綱領批判」の批判

我々が実現しなければならぬのはいうまでもなく共産主義である。共産主義社会（狭義の）とは分業→精神労働と肉体労働の対立の消滅、自己目的としての労働の実現によって、階級がその発生の基盤を完全に廃絶されて死滅し、したがって、国家も党も（政治自体が）死滅する社会である。それは、必然性の国から自由の国への飛躍である。我々の実践は、全てこの共産主義社会を実現するための闘いであり、そこから規定されなければならない。

「注一」「注二」

それは一方では我々の全実践が、「運動が全てで窮極は無し」（ベルンシュタイン）という未来をもたない盲目的な自然発生的実践と区別された、共産主義社会という未来をもつ目的意識的な実践でなければならぬことを意味する。

他方では、単に共産主義社会を理想としていれればよいことでもなく、それを基準として現実を規定すればよいというものでもない。共産主義の未来の運動に体现するものとして、我々の実践が共産主義的であればならぬことを意味する。現実には、資本主義の発生基盤そのもの、階級の発生基盤そのものと全ゆる方法によ

って闘うことを意味する。「注3」

それ故、共産主義とは、単なる理想でもなく、又、単なる現実の運動でもない、現在の中に未来を体現する（二重の時間を持つ）実践のことである。

共産主義社会が必然性の領域から解放された自由の国であるという事は、一つのウクライドではないと意味する。共産主義のウクライドなるものはない。それはただ資本主義社会と過去の一切の社会に階級社会の遺物の否定の上でのみ築かれる。したがって共産主義社会を組織する経済原則や経済法則、あるいは社会法則などはない。

ところで、階級の発生基盤たる分業と精神労働と肉体労働の分裂はどのようにして廃絶されるのか？プロレタリアートが生産手段を占有し、労働証書制（等量労働交換）を実現して生産力が発展すれば分業は廃絶されるのか？否、である。いわゆる社会主義社会から共産主義社会への移行が、生産手段共有の下での労働証書制の実施（社会主義社会）から生産力が発展すれば何らかの社会革命を経ないで自然（発生的）に移行するという楽天的で（間のゆけた）、生産力主義的共産主義論がその典型である。（対島、革マル、日向、その他スター反スター派）「注4」それは結局のところ、必然性の領域にすぎない社会主義社会を絶対化して、自由の国たる共産主義社会と區別せず、結局共産主義社会を永遠の未来に遠ざけてしまう。そして社会主義社会では何か決った原則

こう書くことができる。——各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて」（ゴータ綱領批判、P四五）

「注2」「自由の国は、実際、窮迫と外的合目的性とによって規定された労働がなくなることで初めて始まる。したがって、それは事柄の性質上、本来の物質的生産の領域の彼方にある。」「自己目的として行為しようる人間の力の発展が、真の自由の国がとらっても必然性の国をその基礎として、その上でのみ開花しようる自由の国が始まる。労働日の短縮は根本条件である。」（資本論第三巻第七編第48章）

共産主義社会の理解もマルクスのこれと、エンゲルスとを比べると、その違いは歴然としてくる。後期エンゲルスの「自由必然性への洞察」という誤りが両者の差を物語っている。

「注3」「共産主義は、われわれにとっては、つくりだされるべき一つの状態、現実が基準としなければならぬ一つの理想ではない。われわれが共産主義と呼ぶのは、いまの状態を廃棄するところの現実的運動である。」（ド・イデ、P四八）これは、青年ヘーゲル派的な、陳外論的革命観への批判であり、自らの自己批判でもあることをふまえる必要がある。次のくだりでは、もっと積極的に「この共産主義的意識の大量的な産出のためにも、また事業そのものの貫徹のためにも、人間の大量的な変化が必要であり、そしてこれはただ実践的運動すなわち革命にかいてのみおこりうるのである。だから革命が必要であるのは、単に支配階

（経済原則とか）があつてそれを適用して組織すればよい、と考へることによつて、社会主義社会でも階級闘争が継続することを否定し、したがって階級闘争が唯一の基準であることを否定してしまうのである。

マルクスの「ゴータ綱領批判」それを継承したレーニン「国家と革命」は、社会主義社会も又、階級闘争が継続すること、したがってそれはプロレタリア独裁以外の何物でもないことをあいまいにしている。過渡期社会（プロ独）と広義の共産主義社会（第一段階としての社会主義社会と第二段階としての共産主義社会）と區別するのではなく、あえて區別するとすれば（従来いわれてきた過渡期プロ独と、社会主義社会の両段階を含む）プロ独と狭義の共産主義社会とに區別しなければならぬ。そして、共産主義社会が突然実現されるものではないとすれば過渡期社会は共産主義の事実上の開始、その成長過程として捉えることを意味しはしないだろうか？

「注1」「個人が分業に奴隷的な従属をすることがなくなり、それとともに精神労働と肉体労働との対立がなくなったのち、労働が単に生産のための手段たるのみならず、労働そのものが第一の生活欲求となったのち、個人の全面的な発展にとともに、生産力も増大し、共同社会的富のあらゆる泉がいつそ豊富に湧きでるようになったのち、——そのとき初めて、ブルジョア的権利の狭い限界を完全にふみこえることができ、社会はその旗の上に

級が他のどんな方法によつてもうちたおされないからだけではな。さらにうちたおす階級が、ただ革命にかいてのみいっさいの古い汚濁を払いのけて社会の新しい樹立の力をあたえられるようになりうるからである。」（ド・イデ、P一〇七）

「注4」「ところで、本当の平等は、「生産者の権利はその人の労働給付の如何にかかわらず、必要に応じて」分配される」ことから始まる。共産主義社会構成の序幕でなく、いわばその本舞台たる第二段階がこれである。そしてこれへの推移は、資本主義の排除によつて与えられる。社会主義下の巨大なる生産力の発展によつて自然発生的に行なわれる。この間、何らの社会革命を必要としないわけである。「（「マルクス主義とスターリン主義」対島忠行著）この老いたる闘士は「たい何がいいたかつたのであろうか？もしこの通りならノ連などは今ごろ既に共産主義社会に入つていても不思議はないはずだが……。スターリン主義——国社会主義の批判もせしむるこの程度の違いにすぎなかつたのである。」

ホーネ！ 革共同（革マル、中核）日向派や八派など、せいぜいこれの猿まねにすぎない。

② 世界プロ独と一国プロ独

ところで、マルクスが革命的過渡期（プロ独、社会主義社会を含まない）を世界的にのみ想定していたのに対し、現実には、プロ独は一国プロ独として現実化し、世界プロ独としては実現されなかった。社会主義社会は世界的にしか実現することはできない。しかしプロ独が共産主義社会を実現するためには世界プロ独として組織される以外不可能であるが故に、逆に自然成長的に放置すれば、一国プロ独として自らを固定化し資本主義へ逆もどりしてしまう。これは次のことを意味する。一国プロ独が全世界的に勝利したとしてもそれだけでは決して世界プロ独とはならないというのである。世界プロ独は一国プロ独のよせ集めによる連邦制ではなく、世界的中央集権制でなければならぬ。逆に、全世界的に勝利していかない段階であっても、数カ国で世界プロ独は組織できるとし、又しなければならぬ。勿論全世界的に帝国主義とスターリン主義を打倒した段階と、それ以前では形態は異なるであろう。全世界的の帝・スタ打倒以前では、全ては直接的に世界革命戦争の利益に従属する。帝・スタ打倒以後では、むしろ追討戦としての世界革命戦争の形態変化に規定されて、より間接的な形で世界革命戦争の利益に従属する。すなわち生産手段と労働力の世界党への集中を基礎にして、その世界的な計画配置、移動という、世界プロ独の本来の政策を実現しようという、間接的な形をとって、世界革命戦争の利益に従属する。

な努力はただ方向をそれないうにするだけでよかった。だがプロレタリア階級闘争はプロ独はその逆である。何かこの荷車から手をゆるめても絶対におちない支え（経済原則とか経済法則とか）があると考えるのが革マル、日向等の反スタ派であり、スタである。

④ブルジョア国家は、「一階級が他の階級を支配するための階級の組織された暴力」たる国家一般では規定しえない歴史的特質を持っている。古代封建制国家も中世封建制国家もブルジョア国家も、そしてプロ独国家も、この階級支配の組織された暴力という点では全て共通している。ではこれら国家一般と区別されるブルジョア国家の歴史的特質とは何か？それは、政治的上部構造としての国家と経済的の下部としての市民社会（ブルジョア社会）との歴史的な分離ということである。

資本主義社会は、一切の客観的の生産手段（土地や道具から分離された主観的の生産手段）プロレタリアートの創出に歴史的基礎をわいている。このことを通じて資本は一切の生産手段を商品化し、生産過程を資本の生産過程（剰余価値の生産）として表現した。資本主義以前の社会では、一切の被搾階級は直接的の生産者は生産手段に固く結合されていたが故に、階級の経済的搾取関係を階級的（政治的）支配関係とは切っても切り離せず、一体的であった。即ち、一切の政治的支配は、搾取の形式の維持ではなく、直接に搾取の内容を維持することを目的としていた。支配階級は直

③ 世界プロ独と社会主義社会

我々は社会主義社会を世界プロ独の一段階と規定した。それは社会主義社会以前の世界プロ独の段階と社会主義社会を区別する指標は何か？世界的労働証書制（等量労働交換）の実施、即ち階級差別的の廃止である。実体的には階級は廃止され資本家もいないが、階級発生を基礎としての分業（労働の質）は止揚されていないが故に不断に、階級発生を圧力を生みだし、それ故、資本主義の復活、ブルジョアジーなきブルジョア国家の復活に対する闘いが継続されなければならない。階級闘争は直接的実体的な外面の闘いから、小商品生産や習慣の生み出す力、労働力所有という意識などとの闘い間接的抽象的な内面的な闘いという性格をますます帯びてくる。もちろんそれは闘いの手をゆるめれば直ちに後退し、実体的にも階級を発生させることになる。

プロレタリア階級闘争は其の発展としてのプロ独は、上り坂を荷車をおしてあがっていくようなものである。坂の上のほりきるまでは、即ち共産主義社会が実現するまでは、一瞬でも気を許して力を抜けば、荷車はたちまち下（資本主義社会）まで転がりおちていってしまうだろう。荷車をおちないよう支える絶対的な保障はただ頂上までのほりきろうとする自分の絶えることのないがんばりだけである。資本主義社会の確立までは、むしろ逆に、下り坂を荷車にのっておちてゆくようなものであり、意識的に

接し武装しており、国家とは武装した支配階級の暴力そのものであった。生産手段相互の先天的結合に規定されて、階級的搾取関係は直接的具体的個別的で狭く、大きな限界を持っていた。支配階級の直接的武装は直接的暴力支配はこれに対応するものであり、従って階級的（政治的）支配も、直接的、具体的、個別的で狭く、大きな限界を持っていたのである。

だが、直接的生産者プロレタリアートの一切の生産手段からの分離を基礎とする資本主義社会は、一切の階級的搾取関係を、個別的、直接的、具体的な狭い限界から解放し、普遍的、抽象的、間接的（媒介的）を無限に可能な搾取を実現した。これに対応して、階級の政治的支配関係も、普遍的、抽象的、間接的な無制限の支配可能な関係として表現された。こうして、階級の搾取関係と階級の支配関係は経済的の下部構造を政治的上部構造として分離したのである。

このことを別の面から考察しよう。第一に資本主義社会は、主観的の生産手段の創出を基礎とし、一切の生産手段を商品化するにとよって価値法則の貫徹する社会である。それは、一切の人間が私的な商品所有者として平等であり、私的な商品所有者相互の自由意志に基づく商品売買関係が維持されていさえすれば、資本主義（ブルジョアジー）は、自動的機械的にプロレタリアートを支配し搾取しようということの意味する。社会の構成員全てが、歴史上、はじめに私的な個人（商品所有者）として分離されたこ

とを前提にして、ブルジョア国家は、これら私的個人を全て（商品所有者として）平等であると宣言し、絶対的無差別に普遍的に商品所有者としての権利を保障するもの公権力として現われる。（公権力というのは、私的個人の集合体としてであり、私的個人ということに対応している。）それは私有財産的法秩序として表現されるからブルジョア国家は法治国家である。

第二に、ブルジョア国家権力は、私有財産的法秩序を維持する執行権力として現われる。形式上の国家権力たる議會などと違って実質上の国家権力たる執行権力は、私有財産的法秩序を維持するためには、中央集権的に強固に組織されなければならない。それ故、その組織原則は位階制であり、上から下への命令制である。当然ながら、それはプロレタリアートを大量に使用するから、その階級的反抗を防止するためのものである。この執行権力としての国家権力を維持するために租税が徴収される（租税国家）

第三に、国家権力が私有財産的法秩序維持の執行権力として独自に組織されるということは、この執行権力が私有財産的法秩序を維持する機能を果たしてさえいけば、それを具体的に担うのは必ずしもブルジョアジーでなくてもよい、ということを意味する。なぜならば、私有財産的法秩序が維持されさえすれば、ブルジョアジーは価値法則を通じてプロレタリアートを自動的に無制限に搾取することができるからである。こうして執行権力を主要に担う政治的支配集団とブルジョアジーとの特殊な分業関係が成立す

る。上部構造と経済的下部構造との分離そのものを破壊するという意味においてなるのである。マルクスはコンミュニオン四原則（全人民の武装・官吏の選挙制リコール制・労働者なみの賃金）をプロ独国家の原則とした。即ち、プロ独は、私有財産制度そのものの破壊―賃労働制の廃止をめざしてプロレタリアートとその指導下の諸階級の労働―生産を社会に組織化し、他方、国家は直接に武装した人民の暴力として組織されること、即ち、社会的生産組織体であるとともに全人民武装の組織でもなければならぬということである。それは、経済的下部構造と政治的上部構造とを一体化し結合することを意味する。

(イ)当然ながら、国家が特殊の抑圧力であることから、それを指導する党―政府―軍などが特殊な抑圧力として上部構造化し特殊な抑圧力として自分を固定化しようとする動きとの意識的な闘いが不可欠である。この闘いをめきにして、生産力が発展すれば自然発生的に国家が死滅すると考えるのは全くの誤りであり、ブルジョアなきブルジョア国家への逆転の結果せざるをえないだろう。それ故この国家死滅への過程は、最も目的意識的な過程であり、党の指導する階級闘争の過程である。それは同時に党の指導を必要としなくなることへの闘い、党の不断の自己否定の過程であり、指導と被指導に緊張関係をはらみつつ両者の一体化する過程である。共産主義社会を実現するプロ独の一切の基準や適用されるべ

る。第一次大戦までヨーロッパでは、殆んど全てが王制や帝制であり、共和制はむしろ例外であったことは、このことを端的に示している。そして絶対王制もなお封建的土地の分与関係には基礎を置きながらも、資本の本源の蓄積を強行することによって封建的関係の基礎なる封建的農業共同体を破壊して封建制社会の解体を促進する史上最大の中央集権的執行権力であるという意味で、初期ブルジョア国家権力をなす。

それ故、ブルジョア国家権力であるかないかということとは、ブルジョアジーが執行権力を実体的に構成しているかどうかによってではなく、その執行権力が私有財産的法秩序維持の機能を果たしているかどうかによって決められるのである。

以上、三点の結果として政治的上部構造としての国家と経済的

下部構造としての市民社会が歴史上初めて分離するのである。

⑥ マルクスは、バリ・コンミュニオンを総括して、プロレタリアートはできない国家機構を利用することはできず、これを粉碎しなければならぬとした。それは、できあいの国家機構こそブルジョア国家権力そのものだからであり、プロレタリアートが利用できるはずがなく、例えその機構をプロレタリアートが利用したとしてもそれはブルジョア国家の性格を変えるものではないからである。プロ独国家は、共産主義社会実現のための過渡の国家としてまさに死滅しつつある国家といえるが、それはこの政治

経済原則などは介在しない。根本的には、それを指導する党の問題として以外ありえない。

それでは、党は一体何に依拠して指導するのか？それは大衆の自発性、創造性であり、それ以外に依拠すべき原則などはない。それはつまるところ、党の指導方法としての大衆路線という問題に依拠する。一切の力の源泉は、大衆（階級）であり、それに依拠し、大衆の自発性をひき出し、発展させること、このような指導方法によらないでは、共産主義社会を実現することはできない。左翼地帯も指摘するように、大衆路線は「出所不明の思想の問題であるよりもむしろ、ゲリラ的実践の問題、闘いの場と深さの問題である」（『十月革命の挽歌』情況70年10月号参照）。

従って革命戦争の基礎の上でのみ本来の性質をあらわしうるのであり、平和的大衆運動の中での大衆追従路線ととりちがえてはならない。

(ニ)プロ独の二大政策は、全人民の階級的武装としての、全人民武装の組織化と、労働生産の組織化であり、両者の一体的遂行である。

全人民の武装は、バリ・コンミュニオンでは即自的民兵制の組織化にとどまり（この故にベールサイユ軍に敗北した）、ロシア革命ではその限界をこえて中央集権的正規軍に進んだが、常備軍化―

ブルジョア軍隊化の危機と闘うことができず、これを基礎にした官僚制が政治的上部構造に特殊な抑圧力として固定された。中国、ベトナム、キューバ等では、正規軍―遊撃隊―民兵という立体的な構造を作出し、革命戦争を闘うための最も強力でしかも最も革命的な構造であることを発見した。

そこでは正規軍は、党の指導する軍隊として、単に戦争するだけでなく、生産に参加し、大衆を組織する軍隊であった。それは、正規軍が常備軍化する危険と不断に闘っていることを意味するとともに、労働の質そのものを変革するような巨大な意味をもっている。

そして、正規軍内部での民主のための闘い（中央集権的に組織されているからこそ正規なのである。）が継続される。他方、生産から遊離しない遊撃隊、民兵は生産組織毎に組織されるか、生産組織体が武装化されることによって、正規軍とは逆の方向からの労働の質の変革が闘われるという意味をもっている。又、遊撃隊、民兵においては正規軍とは反対に集中のための闘いが行なわれなければならない。

又、党、政府の幹部の下放（肉体労働への従事）、都市と農村の融合（工業の地方分散と農村での工業建設）、労働力の都市と農村の移動のひんばん性などによって、肉体労働と精神労働との

世界プロ独は世界的中央集権制（統一共和制）でなければならぬ。（それがどのような道をたどって実現するかを予想すること、即ち、革命の未来学にみちじ論が主眼でなく、又そんなことは予想することはできない。）それは世界党―世界政府の下に、各国の政治・軍事・経済的文配の権限を集中させることである。

この権力の集中を基礎として、生産手段、労働力の、世界政府への世界的計画的配置、移動を実現する。勿論、帝、スタ打倒以前の世界革命戦争段階では、直接に世界革命戦争の利益に従属してなされ、スタ打倒以後の追討戦の時代では本来の政策を実現することができるといふ違いはある。

各国の赤軍は世界党―世界政府の下に編入され、世界赤軍へと再編される。世界赤軍は、世界党―世界政府の直接的指揮下の世界的戦略部隊に世界の主力部隊と世界党―政府の間接的指揮下の各国支部の相対的独自の指揮下の各国主力部隊、各国地方部隊と民兵によって構成される。

世界プロ独の第一段階では世界党、政府への生産手段（労働力を含む）と世界赤軍の集中を基礎にした、政治、軍事、経済的指導権の集中に反対する、民族利害の主張、あるいは支配的民族の独自利害の主張などの傾向と闘わねばならない。

対立の止揚、精神労働者、官吏の官僚化、との意識的闘いが現在の遂行されている。これらの実践は、世界革命戦争の時代という今日の条件の下では、最も正しく革命的な実践である。

以上のプロ独の歴史的经验を総括すれば、マルクスのコミューン四原則はまちがっていないにせよ、一般的な原則にとどまらず、不十分であることがわかる。現実をもっと深く進んでいる。このことを認めなければならぬ。その意味で、我々は、むしろ中国やベトナムの経験をこそ学ばなければならない。

⑤ 世界党―軍建設をめざす国際党派闘争

一 国プロ独が全世界に勝利したとしてもそれだけでは世界プロ独は実現されず、逆に数カ国だけであっても世界プロ独を組織しなければならないと先に述べておいた。

一 国プロ独、あるいは、そのよせ集めたる連邦制プロ独の止揚としての世界プロ独は、いかなる点において一 国プロ独を止揚するのか？この点をこそ問わなければならない。何故なら、世界革命戦争の戦略的対峙から反攻への過渡としての現在、それこそが現実的に問われ、要求され、しかもその条件を成熟させているからである。

世界プロ独の第二段階としての社会主義社会は、世界的労働証書制（等量労働交換）に賃労働制の廃止に階級差別の廃止をメルクマールとする。

この段階では、世界赤軍は正規軍が廃止され言葉の真の意味での全人民武装に民兵制への単一化がcaちとられなければならない。それは、労働証書制の実施とイコールではないにしても、それへの移行なくしては共産主義社会への移行がcaちとられないという意味において不可欠である。

勿論、武装の組織形態は階級闘争の発展に規定されているから、それがどのような形態をとるかは将来の問題であり、現実が解決するだろう。従って、我々は、正規軍の廃止、民兵制への単一化が社会主義社会のどうしても通らなければならない道であること指摘するだけにどめておく。

以上の綱領的基準は、世界革命戦争の鉄火の上で展開される国際党派闘争においてのみ生命力をもち、又、不可欠である。勿論、世界革命戦争の新たな経験のなかで新たな内容にかきかえられることを否定するものではない。

そして、帝国主義心臓部、日本での革命戦争も、この世界プロ独（世界党―政府）の日本支部としてうちたてられるべき権力を規定し、このプロ独権力の下に人民を組織する闘いに権力闘争を

展開しなければならない。即ち、我々のスローガンは、「世界プロレタリア独裁」世界社会主義共和国（日本支部）臨時革命政府）樹立にむけて闘おう」でなければならない。

獄中同志の作風に学び、あわせて

建党建军活動の前進のために

(1) 獄中通信に現われた新たな作風の問題

版7まで発行された「獄中通信」は従来の獄中斗争とは全く異質な、英雄性、献身性、創意性を発揮している獄中同志の作風を示している。蜂起かゲリラかの政治軍事路線、組織路線上の論争がこれまでになく大胆に、かつ深く広い質で展開され、数多くの独創的な提起がなされたと同時に、獄中諸同志の革命兵士としての共産主義的な作風がくりだされている。長期の苦痛にみちた獄中生活（捕虜生活）にもめげず、政治軍事組織路線の根底的な総括と提起が初めてなされたことの意義は重大である。前段階蜂起路線を清算して革命戦争路線を確立し、遊撃戦を開始されたことなど多くを我々は獄中通信から学ぶことができた。そこで展開された論争は、従来の党内闘争―党派闘争の水準と地平を画期的に越えるものである。又、いったん権力に自供したり、屈服していった部分も、獄中通信に参加するなかで、同志からの批判を謙虚に受け入れ、誤りを自己批判し、作風を改めることができるようになった。このようなこともまた、従来の我々では考えることもできなかったことである。明らかに、獄中同志のこのような新たな実践は、我々の現在の、又将来にわたる組織問題の解決の先駆

けとなるものであり、非常に重大な意義を持つものである。獄中同志の実践の意味をしっかりとつかみ、これを全組織をあけて学び、革命戦争を闘い抜く共産主義の作風を築いてゆかねばならない。

(2) いわゆる消耗・脱落の問題

69年赤軍派結成以来、我々の中から多くの有能な活動家や指導者が戦列から離れたり、脱落していった。いわゆる消耗し脱落という問題である。消耗や脱落という問題は確かに69年以前にも数多く存在していた。だが、69年前段階蜂起―革命戦争の開始という条件の下では、従来の平和的大衆運動、半合法的大衆運動の下の消耗や脱落とは異なる、もっと厳しく、更に重大な意義が存在している。革命戦争を闘い抜く共産主義にとっては、この問題はどのようにしても解決しなければならない、致命的な問題である。

革命戦争が言葉の上だけのものではない限り、それは勝利か死かの厳しい困難を闘いである。その厳しさ、苦しき、困難さは、60年代的な半合法的大衆運動のそれとは比較にならない。従って、

その苦しさ耐えられなくなる者が多数でてくるのが当然であるが、事実上、この革命戦争の時代こそ、これまで以上に、より広範な人民が立ち上る時代であることを示している。我々が多くの消耗・脱着を生み出してきたことは、ある意味では、60年代型平和的大衆運動のせい肉をふるいおとすプラスの意味をもっていったが、何もかわらず、やはり我々の主体的な立ちあぐれをまどうことなく示しているのである。我々が革命戦争の大道を勇気と確信をもって進もうとすれば、この問題を解決すること避けて通ることはできない。この問題の発生の原因は、第一には、政治軍事路線、組織路線上の問題であり、第二には、党一軍と各同志の作風の問題である。

政治軍事組織路線と作風の問題はききてもきり離すことができない。この点について考察してみよう。

(3) 前段階蜂起路線下の組織路線・作風と 革命戦争路線下の組織路線・作風

我々は、赤軍機関紙(新聞) 版7・8と獄中通信、革命戦線通信等を通して、又、現実の遊撃戦の展開を通して、前段階蜂起路線を清算し、革命戦争路線に転換することができた。

革命戦争路線とは、長期の革命戦争(持久戦)を通じて国家権力を打倒し、プロ独権力を樹立することである。一方、前段階蜂起から、召喚主義との非難をあびた。勿論このような非難は、八派ソヴエト運動派の平和的大衆運動主義的な限界をおおいかくすものでしかなく、その意味では全く見当違いな非難であった。赤軍建設か、ソヴエト建設(全共闘・反戦行動隊や地区共闘建設に一面化する)かという論争の次元では明らかに、我々は優位に立っていたのである。後者は、いわゆる階級形成党派とよばれ、下からの党建設を主張した日和見主義者であった。

だが今や、革命戦争(持久戦)を開始した地平から見れば、我々の上からの党建設・建軍路線は相対的な優位性、相対的な正しさに止っていたのであり、したがってそれは、建軍活動の偏より、いびつさといびつさの一体なのであった。どのような意味で偏より、いびつであったのであろうか。先で説明してきたように、長期にわたる革命戦争は、正規軍(中央軍)だけが武装しているのではなく、正規軍・遊撃隊・民兵の三結合が最も正しいし、最も革命的な陣形である。人民の軍隊とは単に革命のために闘う意識性を持った軍隊という意味ではなく、この三結合の合体即ち全人民の武装のことをいうのである。長期の革命戦争を闘う最大の鍵は、大衆の自発性であり、大衆を思いきって広範に立ちあがらせることである。

これをなれば、革命戦争は勝利しえず、又、たとえ勝利したとしても、ロシヤのようになり、変質してブルジョア化してしまわざるをえない。赤軍は、単に戦争するだけでなく、大衆に宣伝し、大衆を組織し、党組織をうちたて、又生産もする

起路線は、69年安保決戦の高揚の中で、平和的大衆運動を極限まで、につめることによって提起された戦術(革命的敗北主義戦術)であり、又、これを通してのみ革命戦争路線に転換しえたという意味で歴史的な意義と限界をあらわすもっていた。だが前段階蜂起路線は基本的に速決戦(短期決戦)であり、平和的大衆運動の極限的戦術たる革命的敗北主義戦術は、既に革命戦争の領域に一步踏みこんでいる事態の中では、どうしても玉石混交的な色彩を帯びざるをえなかった。

69年9・7以降のブンド分裂から11・5大菩薩での敗北までの過程、またそれ以降、70年秋の前段階蜂起中止(路線転換)までの過程は、それぞれ限られた短い期間内に(前段階)蜂起の軍隊を建設しなければならぬという至上命令での組織建設の苦しみであった。限られた期間内に、前段階蜂起の一切の準備を完了しなければならぬという条件の下では、政治・軍事路線・組織路線上の論争も真剣に組織されず、又、諸々の欠陥や困難は、きり棄ててゆかざるを得ず、腰をしょくくりとすえて、党一軍を建設してゆくことは、不可能であった。一切を蜂起の軍隊建設に集中し、革命戦線を学習会と平和デモの組織にすることは、一方で、軍を戦争の中から建設するのではなく、純粋培養的に極めてイデオロギッシュに建設する道を選ばせ、他方で大衆戦線の指導を放棄し地区組織や大衆組織を解体してゆく破目に陥った。

この様な強引な建軍路線は、ブンド連合派や八派の日和見主義というさまざまな役割を負っているという毛沢東の指摘もここに於てはじめて、その意味がはっきりするのである。そして、革命戦争路線の道を進むとき、我々がロシア赤軍よりもむしろ中国紅軍やベトナム人民解放軍から学ぼうとするのはこのためである。革命戦争路線は大衆路線と切り離すことができず、逆に革命戦争路線の中でこそ大衆路線は、大衆追随路線とは、より区別され、その本来の力を発揮することができる。このことをしっかりと理解することは今の我々にとって極めて重要なことである。

大衆運動から一担、相対的に分離した地平から党一軍を建設してきた我々は、その党一軍が、革命戦争を意識的に開始した現在、違った意味で、大衆の結合をもちと、大衆を思いきって立ちあがらせ、大衆から学ぶという方法を採用しなければならぬのである。

革命戦争路線の下では、その場しのぎの、急場の間に合せの建軍路線は役に立たず、致命的とさえなる。いついつの時期にやるとスケジュールが決った戦争(蜂起)に向けて作られる軍隊はイデオロギッシュで純粋培養的であり、実際の戦闘にどれだけ機能しえるかは保証できない。その意味ではこれは党と軍のつき木であり、旧態依然たる党と、そこから片足だけわけた、カッコつき軍隊の加算にすぎない。もし、真の革命軍であるならば、古い党組織につき木できるはずもないのである。又、このようなスケジュール的な戦争(蜂起)はそもそも敵の土俵の上で(即ち敵の

時間にあわせて)相撲をとるのにすぎないのである。革命戦争の特権は、時間と空間の利用ということである。とりわけ、いつでもどこでも攻撃をかけることができるということが、敵をへとへとに疲れさせ、敵の攻撃を極限まで強めさせることによって味方の力を増大させ、反攻を準備することができる最大の根拠である。そのような革命戦争を闘う軍隊は、実際の戦闘(実戦)によってしかつくられる筈がなく、イデオロギッシュな純粋培養などとはそもそも不可能になる。(現在のブンド連合派がこの誤りに陥っている)

(前段階)蜂起の軍隊建設という組織路線下でのいびつな建軍路線下では、大量の消耗や脱落は不可避であり、この現象をくいとめ、長期の過程を通じて解決することも不可能であったと云わねばならない。前蜂起路線が前提となっているため、政治軍事路線上の論争も深くまきおこらず、真剣に組織されず、若干の批判や不満も論理化されることなく、きりすてられた。計画的な党建設という点でも失敗していたのである。政治軍事路線の誤り、組織路線の誤りの党内への反映である。

このことは党一軍の作風のうえではどのようにあらわれたか？まず第一に、軍隊の建設、軍への志願を個人的決意の問題にすりかえる傾向である。それは各個人に死の決意をせまり、決意しえた者だけが軍に入り、決意しないものは切りすてられた。即ち、組織路線が中央の武装ということに限られたため、これだけに一

前蜂路線下ではこのようなことは不可能に近く、小数の最も革命的献身的な同志だけがその任に耐えることができたのである。(その意味で旧来の中央軍は玉石混淆であった。)以上のような致命的な濁点にもかかわらず、連軍運動を堅持してきたことが今日の地平をきり開いてきたことは疑いをほさむことはできない。しかし、革命戦争路線下での遊撃戦の展開は新たな問題を提起している。そして革命戦争路線の下に於てこそ、我々は作風の問題も正しく解決することができると考えている。

(4) 日本革命戦争の現段階―都市ゲリラ戦と戦闘団の形成

68で解明され、また京浜安保共闘の同志や赤軍中央軍によって現に開始され展開されている革命戦争は、都市ゲリラ戦である。69年安保決戦↓前段階蜂起の敗北に規定された敵権力の優位制圧という条件の下に於ては、今すぐの蜂起、それによる玉砕・敗北という道をさけて十年、二十年という長期の革命戦争を通じて、味方を保存し発展させ、敵を襲撃しようとするならば、武装闘争は敵の制圧下の都市に対しゲリラ戦(遊撃戦)を展開する以外に道はない。戦闘形態は主観的に味方によって決定され、せんたくされるのではなく、敵と味方の力関係によって、決定されるからである。勿論だからと云って我々が単純に中南米型の都市ゲリラ

「面化されたのである。勿論、こうして作られた蜂起の軍隊は、今迄のものとは異質な高度な組織となりえた。このことは大切である。だがこの決意が持続しなければ、どうなるのか？組織的に解決することができるか？少くとも、それは短期の間には解決しえない場合が多いから、この部分はきりすてられ、脱落せざるをえない。

第二に、党中央や中央軍に於ても、緊張関係に耐えられないとき、それを個人的問題に解消してしまい、組織に提起して、批判をうけ、自己を改造しようと努力しないから結局、組織から脱落(棄発)するという形態をとる。私心を全てさらけだして、その限界を同志間で批判しあい、克服するという道かとれない。

第三に、一、二の弱さをカヴァーするため、建軍活動が、命令主義的な傾向をおびてくる。だが、革命兵士を命令や規律一般によってつくることなどではできないから、ますます限界が露呈する。これは、前蜂起路線―蜂起の軍隊建設路線が、未だ60年代型半合法的大衆運動の延長上にどまっていたことを意味している。

第四に、以上のことから党一軍の作風の問題がある。そこにされ、技術主義に陥いるため、党一軍の強固な団結が形成されない。私心をさらけだし、全ゆる個人的問題まで組織で解決される努力がなされなければ死を共にする絶対的な信頼関係が形成されることは困難である。これは短期間でつくられるのではなく、長期にわたる日常不断的の努力が必要なのである。

戦の延長上に革命の勝利を考えているということにはならない。

(戦略問題については前章参照)我々は武装闘争―革命戦争を前提にして問題を立てている。この点で武装闘争―革命戦争を紙の上だけにとじこめ、あれこれと喋りだけをしている諸君とは全く違った地点に立っていることをはっきりしておかねばならない。都市ゲリラ戦はテロリズムだ、戦役主義、戦術主義だ、軍事力学主義だ、などと批判する党派(社共、共マル、八派、特に日向派)は左翼でも何でもない。特に日向派の4・28闘争に象徴的にあらわれた武装闘争への敵対は、彼らの日和見主義―武装闘争敵対者という正体をはっきりと示している。又、ブンド連合派の諸君も、武装闘争を口にするが、都市ゲリラ戦ではだめだ、蜂起だ、と云うだけで、待機主義に陥っている。したがって、彼らは、革命戦争派と人民戦争派(社共議会議主義)、八派ソヴェト運動主義)の間であり、未だ我々の陣営に移行しているわけではない。このことはふまえておかねばならない。連合派が党の正規軍(R・G)建設、蜂起の体系的非公然党建設を叫び、戦闘団主義はだめだと批判しても、それは彼らが武装闘争を展開しえないことによって、現在の武装闘争の局面が必然的にとらざるを得ない戦闘形態(ゲリラ戦)の問題を頭の中でだけ考えている彼らの立ち遅れを示し、それを正当化するものでしかないのである。

さて、敵権力の制圧下での革命戦争の現段階がゲリラ戦であるということとは、現在の軍建設が、相対的に分散(結合のゆるやか

な戦闘団の形成という段階にあることを意味する。都市ゲリラ戦は、比較的少数人数のグループが、相対的に独自に作戦行動を展開し、攻撃と退却をくりかえすことである。決定的な戦闘を遂げ、戦闘力を保存し、発展させること、これが主眼である。機動的な大部隊による作戦行動は自殺を意味する。戦闘団は、作戦を計画し、展開する独自の決定権をもたなければならず、中央からの指令がなくとも戦争を展開しなければならぬ。各戦闘団間の交流はできる限りさけるべきである。独立戦闘団の利点は、その犠牲が、他の戦闘団に及ぶのを防ぎ、組織全体に及ぶのを防ぐ、ということである。その意味で、前鋒路線下の中央軍のような、きわめて正規性が強く、中央集権的（中央集中的）な軍隊ではなく、遊撃性が強く、分散性を保持しなくてはならない。

だが、独立戦闘団―遊撃隊は、①権力の追求をさせて身をかくし、次の戦闘を準備する出撃と退却の根拠地（ゲリラ基地）の全国的統一性の問題、②戦闘団が大衆から切り離され、大衆工作の展開が困難になることからくる閉鎖性、③戦闘団への戦略的指導、政治指導と内部での政治工作の困難性、これによる技術主義、匪賊主義（赤色ギャング主義）の発生という問題、これらを解決しなければならぬ。

① 根拠地（ゲリラ基地）の問題

都市ゲリラ戦が敵の制圧下で作戦するということは、農村根拠

は一体である。

② 戦闘団の閉鎖性の克服

戦闘団は、戦争を通してのみ政治を表現する。それは、市民生活を営み、敵の目をくらまし、軍であることを敵に悟らせない二重の顔をもつことが必要である。現在のように、作戦行動の全容が敵に発覚し、組織要員を敵に知られており、指名手配されているという状態はすでに限界に直面していて早急に克服すべき課題として存在している。

二重の顔をもった軍―戦闘団は、当然にも、大衆運動から切りはなされ、大衆工作の展開は困難になる。これが、軍の閉鎖性をもたらし、独善的な考えをばらばらす原因にもなる。

大衆への宣伝、工作、組織化、大衆の武装化が、必要不可欠であるにもかかわらず軍がその機能を果せない状態では、革命戦線がその任務を果さなければならぬ。即ち、軍が戦争を通してのみ政治を表現するのに対し、革命戦線は、その任務として、宣伝隊、工作隊、赤衛隊の役割りを果たさなければならぬ。大衆の目にみえる赤軍は、即ち、大衆から接触できうる唯一の赤軍は、革命戦線であり、革命戦線を、直接的媒介にして、大衆の組織化を獲得することができる。

この革命戦線の人民内部における、深く、そして、広い組織化―これをもってしか、軍の閉鎖性を克服できない

地―解放区という目に見えた空間的な解放区が形成されない段階であることを意味する。だが、ゲリラ戦は、根拠地がなければ展開できない。ゲリラという魚が泳ぎまわる人民の海がなければゲリラ戦は展開しえず、発展しない。前章でも指摘しておいたように、根拠地―解放区とは、党―軍の組織する人民のことである。それが、空間的にも一定の地域を制圧しているが、敵の制圧下で目に見えない解放区―人民の海が存在するかどうかのちがいである。

現在は、後者、即ち、敵の制圧下で党―軍が組織している人民―政治的解放区をつくり出し拡大しなければならぬ段階である。これは、党―軍が大衆を組織し、武装させてゆくことと切り離せない。又、それは、大衆運動の発展段階とも不可分であり、それに規定された大衆の意識を十分に考慮することが必要である。ひとりよがりの武装闘争ではためである。こうして、党―軍が自分の武装と組織の発展だけを考えるのではなく、大衆運動、大衆路線に注意深い考慮を払う時、革命戦争への大衆の支持（兵站・支援網の拡大）と、大衆の独自の武装闘争の発展という状況が生み出されてくるのである。独立戦闘団、遊撃隊は、独自性を保持しながら、この党―軍の政治的解放区を泳ぎまわることによって自己を保存し、発展させなければならない。この点で全国的な結合を維持しない場合は、敵の手中に陥り、敵に逮捕される危険性が高くなる。作戦行動の独自性、分散性と、全国的な統一性、これ

し、このことでこそ、軍の閉鎖性を克服でき、そして、このことに媒介されて、軍の中央の指導は、生きてくるのである。

そして戦闘団―遊撃隊が、より大規模に発展すればするほど、この政治的解放区は、より拡大でなければならぬ。そうでなければ、革命戦争も、建軍活動も発展しえないのである。又、作戦行動も次第に全国的統一性、集中性を強めてゆかねばならない。

③ 軍への戦略指導、政治工作

中央集権性が希薄である故に、中央からの戦略指導、政治指導、内部での政治工作は、前鋒路線上の中央軍と比べものにならないほど困難になっている。この点では、戦闘団内部での政治工作を強化し、作風を整えることがこれまでに以上に重要であり、決定的な比重をもってくる。遊撃戦が発展し、正規性を強め、機動戦への発展を目指すほど、この度合は高くなっていく。又、特に決定的なことは、この戦闘団、ゲリラ軍は、個人の自発性、創造性のみ依拠しているという点である。誰もこのことを強制したり、命令することはできない。玉石混濁的であった旧来の中央軍とは違って「量は少くとも、質の高い」兵士をつくり出すことが最も大切なことである。政治工作、思想工作を強め、自発性、創造性をひきだし高めなければならぬ。このことは同時に、軍に入隊することだけが自己目的化されるのではなく、全ゆる戦線に政治工作、思想工作を強めて作風を整え、革命兵士を作り出す

作業が必要だということである。軍に志願し得ないことを自己目的化させることなく、全ゆる領域、全ゆる戦線での活動を放棄せず持続させること、その中で個人の質をかえてゆくことが必要である。

(このことは後述)

(5) 革命戦線の建設

(中略)

ブルジョア階級の土俵の上でのスケジュール闘争ではなく、大衆の恒常的な武装を組織することは正規軍建設と同じほどの重要性をもってあり、建軍と大衆武装の組織化は革命戦争の両軸である。革命戦争に呼応し、結合する大衆戦線の形成、拡大、発展なしには、軍の泳ぎまわる人民の海、政治的解放区も拡大せず、支援網も拡大しない。議会主義やソグエイト運動と区別される革命戦争の大衆運動、「ゲリラの大衆運動」を形成しなければならぬ。

(6) 革命戦争(軍)を指導する党の建設

前章では遊撃戦を展開する軍(戦闘団)のなかからしか党は生

味してゐるのである。

(7) 建党・建軍活動の二大原則と整風運動

以上建党・建軍活動を総括し、獄中同志の新たな作風を学ぶことを通して、革命戦争路線の下での建党・建軍活動の原則を確立し、党一軍と各人の作風を整えなければならない。

建党・建軍活動の二大原則

① 絶えざる不信、絶えざる警戒ノ周到な用意と綿密な点検ノ

② 私心を包み隠さず、批判を求め他人の私事を批判せよ!

①・②は矛盾していないか。矛盾もしていれば、統一もしてゐる。

① 都市ゲリラは敵の制圧地域で闘争しているため、敵はどこでもいると考えるべきである。今、後を歩いて来るのは私服ではないか? 盗聴されてはいないか? 一方敵のスパイや民間協力心の心配はないか? 初面談で前歴や日常の動向がわからず、組織が保証しない同志はスパイの可能性がある。不用意に喋るな。必要な事以外は喋るな。だが一旦点検が終り、同志であると確認

まれないと主張した。軍の中から党が生まれる。「ゲリラとは生か過程にある党である。」(ドブレ)と同時に、党を共產主義社会を実現する世界プロ独の建設、その下での党建設の問題として提出すべきものである、とも指適した。

確かに、革命戦争を闘う軍の中からしか革命戦争を指導する党を作り出すことはできない。政治指導と軍事指導は二元的に分化すべきでなく、この両者を一体的に担う指導部は革命戦争の中からしか生み出されない(軍中党)。その意味で、党が軍を作り出すとか、党の軍隊とか云々することは、党と軍を接木する破目に陥り、党と軍がそもそも接木できるはずもないことによつて実際には何ら戦争を展開することができないのである。(現在の連合派がそうであるように)。だが、この間の我々の若干の経験は、だからといって軍(戦闘団)の中から自然発生的に党が生み出されてくるといふ幻想を抱くこともできないことを教えている。計画的な党建設がなければ、独立戦闘団は永久に独立戦闘団であり、革命戦争の陣型をつくり出し指導する指導部(党)には発展し得ない。

この点で、最近の遊撃戦の展開は、我々に大きな教訓を与えてくれたのである。我々はこのことをしっかりとふまえておかなければならない。もちろん、それは戦闘団の形成をやめることを意味するどころか、ますます大量に大規模に戦闘団を形成すべきことを、そしてより意識的な深く広い指導部が必要であることを、意味する。

② ①を見る限りでは全く②と相反する、決して相容れぬ関係に見える。だが戦闘も、工作も全面的信頼関係がなければ貫徹できない。全面的信頼関係は、特に非公然部門では絶対に欠かすことができない。(公然部門では非公然部門よりもゆるやかな信頼にどどめるべきであり、特に公然と非公然を媒介する人間は公然部門に全部をさらけだしてはならない。)

信頼関係は何によつてつくられるのか? 信頼関係は自分を精神的にも(単に理論にとどまらない。私事に關する問題まで)、実践的にもさらけだす度合に比例する。

政治路線・組織路線上の疑問や批判、実際の組織運営への意見、諸々の個人的問題(戦闘や逮捕、負傷、死への恐怖、家族やセックスの問題、長期の苦難に耐える自信がない等々)は全て直接所属する組織にさらけだし、心の中に言いたいこと(言いたくても恥かしくて言えないこと)や、わだかまりを残してはいけない。これらの問題は全て組織で討論し、解決の方向を見出すべきである。戦争を遂行する組織にとっては、各個人の問題は全て直接に組織の問題である。もしこれらの問題の解決を組織が保証できないなら、解決できない問題をかかえた個人と組織は十分に働くことが

できず、全ゆる工作は失敗の可能性をもつ。(独立戦闘団に於る大衆と中央からの相対的分離と閉鎖性から生ずる困難、ならびに既に戦闘を開始し、指名手配中の同志が消耗したとき、立ち直らせるための工作等が重要問題である。)

又、もし個人が解決できない問題をかかえこみ、組織に提起することができないでその問題を個人の問題(私事)に解消してしまつたとき、(いわゆる消耗)、彼はまちがひなく組織から脱落し、蒸発し、又、転向(日常生活への回帰、或は権力への屈服)の道を進むことになる。

この場合、特に、戦闘を軸にした任務に耐え得る自信がないことを、個人の能力の問題にだけ(勿論それもあるが、特に肉体的能力に戦闘能力にだけ限れば時間をかけて克服することができるとは)に解消してしまふ場合がほとんどである。俺はもともとためだ、できるはずがない、という風だ。だが、もしそれが事実だとすれば、革命などは夢のまた夢となる。全てをあきらめて帰ることのできる所へ逃げ帰ろう、ブルに逆らわずおとなしく生きようということになる。これは特に小ブル学生、インテリの最大の弱点である。これまでの我々の組織的弱点はここにあったと言つても過言ではない。(路線上の問題を前提にして)

ベトナムや中国、キューバ、全世界の革命戦争は特殊なのか。彼らは特殊な英雄の集まりなのか? 決してそうではあるまい。全て普通の人間、そこらにどこにでもいる人間が闘っているのだ。

志と勇氣の泉は、政治的自覚である。それは書物の上の政治ではなく、現実の生きた政治、その政治的諸関係の断えず発展する動き、それへの関わりを正確に把握、闘いの正しさと味方の勝利への確信、大衆への信頼と大衆に誠意奉仕する態度等を身につけさせることである。困難な、苦痛に満ちた闘いにめない自覚性、英雄精神、自己犠牲的精神はこの政治工作によってのみ培養され、強固なものとなる。四つの第一は我々にとつてもそっくりあてはまる。不断に政治工作、思想工作を強めよう。私心と闘い(すてさるのではなく)組織と人民のために全てを捧げよう。私心とは自らの心に現われるブルジョアの意識であり、このブルジョアの意識(私心(それは日常の態度、習慣、実践に必ずあらわれる))をプロレタリア的意識(組織性)と闘わせ、自分の内部でも階級闘争を貫徹しよう。私的問題(私事)は即ち公的問題(政治問題、組織問題)であり、私心は即ち組織性である。(組織)全体の中の個人、個人の中の(組織)全体。「闘私批修」のスローガンは、我々のスローガンでもある。党の作風、各個人の作風を整えよう。政治路線、組織路線の問題(批判、反批判、自己批判)→党内論争、党内闘争、党派闘争はこの作風の問題と切り離せず、この作風にうらづけられて生き生きしたものになる。そして広く深いものとなる。謙虚であり、大胆であることができる。セクト主義、内ゲバ、リンチの止揚の道はこのことを通してしか実現されない。

それではどうして、このように長期に英雄的に、人を感動させずにはおかない闘いを続けることができるのか?

それは彼らが政治的にめざめ、政治的に組織され、高められてゆくからである。人民は革命党・軍に組織されなければ無力だが、ひとたび革命党・軍に組織され、自分の手に銃を握れば、どんな強大な敵でも打ち破ることのできない無限の巨大な力を発揮する。如何なる国の人民の軍隊(正規軍だけでなく遊撃隊、民兵も含む)も政治工作を本命としている。この意味ではブルジョア軍も同じであり、彼等は反共、反革命、民族主義の政治教育を重視している。だが、やはり、彼等は人の要素よりも、武器にたよらざるを得ず(もし、人の要素を第一とすれば人民の軍隊に変質せずにはいられない)、その反革命政治教育は人民の生活(物質的、精神的)を不断に高め発展させることができず、非科学的で、歴史の進行、歴史の法則にそむくものであるから、客観的な正しさを持ち得ず、革命的な政治に打ち破られ、不断に破壊されてゆく。(もし、そうでなければ彼等の戦争は人民の革命戦争に変質せざるを得ない。)

この革命的な政治は不断に自己を否定し、発展してゆく政治、社会の害悪の原因である階級を消滅し、共産主義社会を実現する政治は、プロレタリアートの創出と発展によって裏付けられる根拠をもっている。

革命軍、革命兵士の戦闘力の源、断えまなく湧きでる闘いの意

個人の全ての問題を包みかくさずさらけだし、組織で解決(物質的には解決できない問題も政治工作を強めることによって解決の道を進むことができる。)することによって、始めて組織の全体的な信頼関係がつくりだされ、生死を共にすることのできる強固な団結が形成される。これは大衆への信頼と大衆からの信頼と一体である。このような関係が形成され、持続するならば、たとえ逮捕され、桐鳴されても権力に屈服することなく、自由や転向も減少し、なくなってゆくだろう。自由や転向の問題は、完全に解決し得なくとも、少なくとも大部分はこのような努力によって解決するはずである。このような道をたどらずしては解決し得ない。決して技術的に解決できる問題ではなく、完結せよと命令するだけで解決できないのである。

スパイ(スパイ摘発)、獄中転向、獄中闘争の問題は、60年の革命戦争開始以来、明らかに60年代型平和の大衆運動のそれとは異なる領域として扱えなければならない。第一に、革命戦争に於る党一軍への人民の信頼度、支持、積極性の培養に於て、獄中転向は人民の信頼を裏切り、党一軍の威信を低下させ、党一軍と人民の関係を悪化させること、他方、断固たる獄中闘争は人民の信頼を高め、党一軍の威信を高め、党一軍と人民との強固で広範な団結を形成する。

第二に、獄中転向、自白は組織を権力に売り渡し、破壊すると

いう点で致命的に反革命的役割りを果たす。そして又、組織内の不信をあまり、疑心暗鬼にさせ、団結を破壊する。明らかに、二の問題は、60年代の平和的大衆運動、半合法的大衆運動とは異質の、より高度の、シビアな問題として存在している。したがって、60年代の組織、規律、作風とは異質のより高度な、シビアなそれが要求されているのであり、従来の上で考へてはならない。獄中転向を克服し、革命戦争の獄中闘争をつくりあげること、これは可能である。

参 考

四つの第一（四個第一）

- 第一は、武器と人との関係。この関係では、人の要素、政治思想の要素を戦闘力の第一におく。
- 第二は、各様の工作と政治工作との関係。軍隊における司令部工作、後方勤務工作、軍事訓練、技術工作などの多くの工作のうち、政治工作を第一とする。政治が「統帥」であり、「魂」であり、政治工作こそ解放軍の生命線であるとする。
- 第三は、政治工作における事務的工作と、思想工作との関係。これは双方とも必要であるが、プロレタリア思想を確立するには思想工作を重点としなければならない。
- 第四は、思想工作におけるところの本の上の思想と、生きて思想との関係。本も読むべきであるが、実際と結合することがより

4. 28 闘争と日本階級闘争の到達点

(1) 4・28 闘争に現われた動向

4・28 闘争に象徴的に現われた大衆戦線の動向は次のようである。

④ 第一に、八派中核の運動派は、10・8「安保決戦」に至る大衆的半合法的武装闘争の成果をくいづぶしながら、カンパニア闘争（スケジュール的デモ、集会）↓産別主義、地区共闘による党建設に一面化してしまっていること。それは、10・8以来の大衆的武装闘争の古い陣型が、敵・味方の強化という条件に規定されて、全く精彩を失って硬直化していることを示している。この様な特徴は、69年秋↓70年6月以降一貫しており、ますますあらわになって来ている。これに規定されて、八派の全国全共闘全国反戦を軸にした結合関係は解体状況にある。ML派は70年6月決戦以降の党内闘争のため大衆戦線には全く姿を見せておらず、八派からひきあげている。ブンドの分裂と連合派の八派解体を掲げての我々への接近も同様である。従って、党派間統一戦線としての八派共闘は、中核派の回りに中核派に反発しつつもくっついてい

り大切である。

※四つの第一は59年彭德漢解任のあとを受けて、国防相に就任した林彪が、直ちに階級制を廃止せずに軍への政治工作を強めることによって、階級制廃止の条件をつくり出すために実施したものである。ブルジョア軍事路線を粉砕し、プロレタリア軍事路線を確立することが主眼である。

うだけの存在になっている。

4・28日比谷野音での集会は、その三分の一を白ヘルが占める中核のカンパニア集会であり、日向派は中核に庇護されることによって生きのびたのである。B・B・M連合として出発した八派共闘はこうして老いさらばえた姿を見せたが、そのことは何も中核派の正しさを証明することでも、彼らの政治的優位さを示すものでもないことはもちろんである。八派共闘の中核へげという状況は、ノンセクト・ラディカルの龐大な層が、八派から急速に離反し、八派中核の集約を拒否しようとする動きとなって表面化している。（華青闘や東大全共闘の八派との対立など）そして八派が党派的には必ずしも拡大していないのはそれを示している。龐大なノンセクト・ラディカル層は、革命戦争に心情的共感を示しながらも直ちには結束しえない。又、八派に反発しながらも八派と訣別して独自の運動構造と政治的へげを形成する力も持ち得えない。ノンセクトが未だ八派から離れないのは、この様な消極的、小否定的理由からである。これは、次の事情、最も根本的な事情に規定されている。

⑤ すなわち、第二に、10・8以来の運動が作り出した権力対八派という対抗関係の中心基軸が、新たに飛躍的に強化された

権力と赤軍派及び日共革命左派の革命戦争派との対抗関係に移行していることである。未だそれが全面的に移行しきっていないにもかかわらず、権力はその状況を先取りして一時的な優位に立っている。敵権力は、革命戦争が、ひとたび人民の中に深い根をおろすならば、その根を断ち切る事は絶対にできないこと、それ故革命戦争を芽のうちにつみとろうと全力を挙げているのだ。

③従って、第三に、革命戦争派が、69年以降赤軍派を始めとして登場しながらも、根本的には、この武装斗争、革命戦争は今よりやく始まったばかりで、その主体は未だ弱く、又、路線上の誤り等が加わって本格的な成長を遂げることができなかったことに規定されている。一言でいえば、革命戦争の本来の性格、根本的な法則が未だはっきりとはその姿を現わしていないということである。革命戦争は、何年、何十年と続く長い苦しい闘い（持久戦）という本質的な性格をもっているから、ここ2、3年の短い闘いだけでは将来を完全に見通すことができないのである。しかも、赤軍派に於ては、大菩薩峠の革命的敗落の後も、前段階級起路線という革命のせ、かち病（革命的敗北主義）に災いされて、革命戦争路線の道を初めから歩むことには長い時間と、幾多の苦しみを経なければならなかった。このような長い時間と、幾多の苦しみは、歴史の転換点を切り開くための必要な犠牲であり、生みの苦しみであったという意味で、我々の革命的伝統、赤軍魂をひきつづかなければならない。このような生みの苦しみを味わってこそ、

ブンドの一切を清算し、体内のいい意味でのブンド的体質を全て吐き出し、本格的に武装斗争に敵対する第二革マル、ネオ革マルとして自己を純化した。最近の彼らの「戦旗」によれば公然とスロロガンとして蜂起・革命戦争派解体を掲げている。この間のブンド内での宇野経済学、スターリン主義、反スタ哲学批判、共産主義論をめぐる論争は、武装斗争の対極に咲いた仇花であり、いずれも消化不良を起している。なぜなら、それは現実の武装斗争を基礎にした論争ではなく、自らはその地点から全く離れて、武装斗争のおしゃべりをし、いがみ合うだけだったからである。

連合派は、左派、関西派、仏派とともに、69年赤軍派との党内斗争において終始右翼的対応をとり、実際的には敵対した。我々は決してこの事を忘れてはならない。左派2号、共産主義13号等は、日向理論に妥協する姿勢を随近にみせているが、彼らはブンドが生み出した最大の體たる日向派の成長に自ら手を貸していた事について自己批判する必要がある。そうでない限り、いくら宇野批判や反スタ哲学批判をやったところで、それは一時しのぎの理論となるだけだろう。理論の正しさ、科学性を競い、誇るだけでは、マルクス理論の理論ではなく、ブルジョア理論である。藤本進治も指摘するように、マルクス主義の理論は「自分が客観的に正当であることを主張するものではなく、そのような主張としてしか自分を表現できないことを、その狭い正当性を変革することを求めるものである。」（「革命の弁証法」83頁）

現在の我々や日共革命左派の革命戦争の道を歩むことができたのであり、この点に關しては、日和見主義者の一切の口汚い罵り、嘲けりを絶対に許してはならない。ただブルジョアの側に移ってしまった輩だけが、革命的伝統を清算し、あれこれのおしゃべりで事をすまそうとするのである。

我々にとっては、だがこのことは、自己の革命性をみせびらかすことでは決してなく、誤りを厳しく正し、革命戦争の大道を自信と勇気を持って進むための教訓としなければならぬ。革命戦争の道は険しく、遠いため、幾多の迂余曲折を経ねばならず、このためにこの道に不安を抱き、絶えず動揺することは避けられない。政治教育、思想教育を重視し、不断に小ブルの傾向と闘うなかで、武装斗争を堅持すること、大衆を思いきり立ち上げさせ、革命戦争の統一戦線を強化し、大衆戦線と支援網を拡大していく以外に、この様な不安や動揺を取り除く方法はない。

④第四に、権力対革命戦争派の対抗関係が徐々に中心軸をなして、八派、革マルの大衆斗争の陣型が硬直し、解体を始めていくというように規定されて、八派、革マルの内部斗争が激化し、党内斗争、党派斗争（内ゲバ）が不毛な型で展開されている。ブンドの日向派対連合派の党内斗争は、明らかにこの間の革命戦争の展開がひき出した産物である。連合派は、内部の不統一を抱えながらも、武装斗争・軍建設を旗印とすることによって我々の側に引きつけられ、他方、日向派は、10・8以降の全成果、第二次ブ

連合派の、資本主義批判としての経済学（批判）↓宇野経批判、共産主義社会論、世界プロ独論も、それ自体としては我々も撰取すべき点はあるが、革命戦争の展開の中で理論の質を変えること、「プロレタリアートが斗争の中で自ら理論を生産することのできる形態へ、その形態の質を一步一步、変えていくこと」をめざさなければならぬ。（彼らの理論それ自体の批判は後述）

4・28斗争における、日比谷野音での日向派との内ゲバの敗北は、4・28斗争での首都再登場日日向派との内ゲバを自ら目的化し、それに一切の力を集中してきた連合派にとっては、正に敗北そのものである。なぜなら、連合派が一方では武装斗争を叫ぶことによって八派から分離し、しかもそれが口先だけで実際には革命戦争派の隊列に加わることができないために、他方では蜂起派という八派・ソグエト運動派とは名だけは異なっているが、中身は同じの大衆運動を八派と同じ次元で形成しようとしていることの結果だからである。

⑤ゲバ棒斗争や、街頭バリケード戦、占拠戦などと同じく、旗ざざお内ゲバも我々が作り出し広めてきた斗争形態である。これらの斗争形態は明らかに60年代後半のソグエト運動の高まりと結びついた一時期に渡る歴史的斗争形態である。これらの斗争形態は当初、それぞれの持った爆発的な波及力や影響力を喪失し、現在ではひからびたものになっている。それは革命戦争の開始と権力の弾圧体制の強化という事態に根本的に規定されているからであ

る。もちろん、全くその意義を失ってしまったわけではない。新たな、偉大な斗争形態である革命戦争、遊撃戦は、これらの古い斗争形態を包摂することができるし、その時これらの斗争形態はそれぞれ有効な役割を果たすことができるだろう。だがしかし八派ソヴェト運動派によってはその役割を担えないことも確かな事実である。

内ゲバという形で党派斗争は明らかに負の遺産である。八派ソヴェト運動派がますます人民戦線に転落してゆくと、だがこの負の遺産はプラスになる何物をも生み出さない。狭い、こそくなセクト主義が横行するのは、自らの運動の範囲、質が狭く閉鎖されたものだからであり、この狭い枠の中でいがみ合うからである。かつて、ゲバ権闘争等が日の出の勢いであった時、このような内ゲバも大きな役割を果たしたことがあった（日共、革マルとの内ゲバなど）。現在のように八派がありとあらゆるスローガンと並べて立ててカンパニア斗争に埋没する時、運動の飛躍を組織できない時、矛盾は必然的に至少なセクト主義の衝突にゆきつく。

敵権力は、この内ゲバが自分に害がない限り放置し、革命的な運動や党派に敵対する内ゲバ（革マルや日向、日共など）は相対的に保護し、それをネタにして革命的な運動や党派、とりわけ革命戦争派を弾圧しようとしている。こうして、権力の内ゲバへの介入も、一般的な刑事公安事件としての処理から、戦略的な視点からの革命戦争派の毀滅をねらったものにかわってきている。

接近し、三派統一戦線を追求してきた。他方、我々に対しては党建設（蜂起の体系的非公然党！実際には地区党・細胞一般を越えていない）を党派性にするという二枚舌を使っている。連合派は、日向派及び八派と対立すればするほど我々に接近せざるを得ず、しかも我々が彼らの口先だけの武装斗争派第二戦線として批判すればするほど、彼らは矛盾を深めざるを得ない。彼らのいう「蜂起派統一戦線」なるものは、八派・日向派のソヴェト派と我々革命戦争派との中間にあって矛盾を深めざるを得ない。彼らの折衷の立場を示している。蜂起一般なるものは、依然としてソヴェト派の枠を越えていないのであり、蜂起派がソヴェト派を解体するというのは突止であり、誤っている。我々は蜂起派統一戦線なるものを革命戦争統一戦線に解体・統合しなければならぬ。

連合派の矛盾と4・28闘争での日向派への敗北は、彼らの蜂起派としての敗北である。単に準備が足りなかったとか、動員が足りなかったからというふうに技術主義的に総括することですませる問題ではない。4・28当日、わが革命戦線（Ⅱ）の公然部隊は、連合派と共に日向派と闘った。意志統一が不十分であったにもかかわらず、傍観せずともに闘ったことけ全く正しい行動である。だがあくまで受動的な対応であり、計画された戦術としての明確な展望を持ったものとしてではなかった。このような中途半端な対応がどうして出てきたのかは、先に述べた通り、革命戦争の展開と大衆戦線への工作の関係が、現時点で矛盾を含んでおり、解決

他方、革命戦争の開始という条件の下では、革命戦争派の党派斗争（セクト的対立）という性格から、直接権力斗争という質を帯びてくる。この条件の下では、人民内部の矛盾と、敵味方の矛盾は、注意深く区別され、その処理の方法は本質的には、前者は教育説得であり、後者は強制（軍事）である。両者の境界線は先駆的な絶対的なものではない。流動的である。竹さかや投石程度の内ゲバとして党派斗争が展開されるのは、明らかにその党派の担っている運動の質を表現し、反映している。しかし、本質的な武装斗争は革命戦争派にとって、敵対矛盾は本格的武器をも使用する撃滅戦（せん滅戦）によってのみ解決される。（説得・教育は従属的な地位に立つ。人民内部の矛盾では逆の関係になる。従って党派斗争は現在のような内ゲバの形態に固定されたものではない。）

又、革命戦争派が完全な非合法化におかれています。権力との関係を考慮しないで、戦略的な展望の下に組織されない、一時的な衝突は敵に避けなければならない。だが、他方、革命戦争派が大衆闘争に介入し、武装闘争に結びついた大衆戦線を拡大しようとする限り、武装斗争に敵対する党派との衝突は避けることはできない。これは革命戦争派にとって解決しなければならない矛盾である。

⑤ブンド連合派は、先にも見たように、極めて中途半端で、二面的な性格をもっている。一方で八派ソヴェト運動派解体、日向一派紛争のスローガンを掲げる連合派とし（それ故に我々にされていないからである。この問題を解決するためには、革命戦争と大衆戦線との関係を分析しなければならない。）

⑥八派ソヴェト運動派の闘争陣型が硬直し、解体を開始していること、だが革命戦争が未だ本格的な発展過程に入っていないこと、その法則性を現わしていない故に、全ての運動を革命戦争の下に統合することができていないというのが現在の事態の特徴である。従って、少数ではあるが、最も高度な質をもって日本の階級闘争の全局を牽引して行きつつある、成長過程にある革命戦争と、数は多く広い領域にわたって持続しているが、長期的に成長が止って分解過程にある大衆戦線（ソヴェト運動）とは、相補り関係をなしている。

革命戦争の側からみれば、主に八派によって担われているソヴェト派大衆運動は、革命戦争の広範な兵站であり、予備軍の役割を果たすべき部分である。そうはいっても、直ちにそうなるわけではない。

第一には、八派の運動の主導を担い手であった学生層は、長期の革命戦争を担う主導な階層ではないこと、したがって八派ソヴェト派が、直接革命戦争派に統合されるわけではない。その意味で、革命戦争派の依拠すべき階級、階層は下層プロに移行させなければならぬ。だがこれも、無媒介的ではなく、現に存在する大衆戦線との相関々々のなかから手をつけていくより他ない。その意味で、学生層は、大衆武装闘争を主に担い、革命戦争

争を開始してきた歴史的役割を、その主要たる地位を、おそかれはやかれ、下層プロレタリアにゆずらなければならぬ。我々はこの移行を主体的に準備し、切り開いてゆかなければならない。

第二に、「安保決戦」以降の階級闘争の質的転換—革命戦争の開始という新たな事態のなかで、色あせつつも八派—ソグイェト運動派が後退しつつ存続していることは、社共・革マル・右翼民族主義との対抗関係を持続していることを意味する。このことは、革命戦争の展開の主要ではないが、やはり、一つの条件をなしている。革命戦争は長期にわたるものであり、大衆を思い切つて立ちあがらせる以外にその最終的な勝利はありえない。「人民の軍隊がなければ、人民の全てではない」（毛沢東）と云われるように、大衆路線とは、相対的独自の地点に革命の軍隊を組織しなければならぬが、同時に軍隊は、大衆戦線と結合し、大衆を武装させることをぬきにしては発展しえない。それ故、八派—ソグイェト運動派は、革命戦争の大衆戦線、支援網（兵站）、予備軍として、我々の大衆工作の対象としなければならない。そして部分的には、彼らの戦闘的街頭行動などの戦術的共闘をかちとることも不可能ではなく、追求する必要がある。我々が、八派やノンセクトラディカルを主要な担い手とする大衆戦線に介入するのは以上のよりな理由からである。

第三に大衆戦線への介入は八派—ソグイェト派との熾烈な党派闘争をぬきにしては実現されない。これらの大衆戦線はそれぞれ

(2) 統一戦線について

①以上のことから、我々は一般的には次のような態度が必要である。即ち、我々にとって、党派間統一戦線とは、革命戦争の統一戦線であり、革命戦争を展開する党—軍を基礎においてしか党派間統一戦線はありえない。そして、この革命戦争統一戦線を堅持し、内部での党派闘争を相互批判と自己批判によって貫徹し、より強固なものにしなければならぬ。口先だけで武装闘争を云々する党派は信用しないし、相手にしないことであり、これはセクト主義でもなんでもない。だが他方、大衆戦線（大衆的武装闘争や諸個別闘争）や支援網は、革命戦線を支持する全ゆるる党派、団体に無条件に窓口を開くべきである。又、革命戦争を直接に支持しなくとも、それが革命戦争の発展を助ける役割を果たす限りに於て、そのような斗争や団体を支持しなければならない。以上を一言で云えば、「党派に対しては厳格に、大衆戦線はできる限り広汎に」というのが二つの統一戦線工作の我々の原則である。

この原則を適用すると、ブンド連合派との統一戦線は、彼らが武装闘争を支持する限りに於ては大衆戦線支援網に於る統一戦線を拡げることが可能であり必要ではあるが、党派レベルに於ては、彼らを第二戦線として位置づけ、その不徹底性と中途半端性を余すところなく暴露しなければならぬ。

4・28闘争での内ゲバにはほぼ全てを賭けてきた連合派は敗北

の党派の指導を受け、その党派闘争の到達点に規定されているのであり、色のつかない白紙の大衆ではない。したがって、これらの大衆戦線への工作は激しい党派闘争を媒介にして貫徹されなければならない。単に武装闘争を呼びかけるだけでも、或いは、世界プロレタリアの樹立を一般的に呼びかけるだけでもためなのである。

この党派闘争は本質的には説得（教育）であるが、公然と武装闘争に敵対し物理的な攻撃をかけてくる党派に対しては、単なる理論的批判にとどまらない軍事戦としても対応できなければならない。その場合には、権力の面前での内ゲバという形態はできるだけ避け、我々にとって有利な時と場所を選び、常に主導性を保持して戦わなければならない。現段階に於ては社共・革マルは、物理力をもってする解体の対象に入るが、このことだけを自己目的化することではない。又、日向派は、ブンドの中から発生した最も悪質な日和見主義者であり、全くの革マルであり、実際にも、赤軍、日共革命左派への武装敵対を何回となく試みているが故に、現在の時点で、階級戦線から放逐することさえあえて辞さない。彼らの反革命性を決して過小評価することはできない。その意味で、4・28当日のFの部隊の行動は全く正しかったのである。又、蜂起派を名のるO戦線や全学闘等のノンセクトラディカル部分が内ゲバを傍観したことは明らかに誤りであり、大衆組織ということを一カクレミノにしていまいな態度をとることは許されぬ。

よって、依然として首都に於る登場の可能性を奪われ、首都での党建設の現実的基礎をくずされた。それ故、4・28闘争での敗北は彼らにとっては深刻であり、この総括をめぐって内部再編が展開されるだろう。彼らの敗北は、革命戦争派にとってもプラスではなく、日向派の反革命性との政治的軍事的な対決を回避することなく、積極的に党派闘争に介入しなければならぬ。

②なお、八派に關しては、ブンドも指摘するように、アジア派（ML、四トロ、共労）と叛軍派（日向、フロント、怒寿）とへの分解が顕著であり、中核は、反戦、高校生などの組織活動の成果を防衛しながら、守る会型労働運動と地方選挙によって公労協、中小企業プロを吸収しようとしている。だが、先に指摘したように、これら諸傾向（総体としての人民戦線派への転落）は、60年代の成果をくいつぶしているのが実情であり、従って大衆戦線、個別闘争のすそ野は拡大しながらも、必ずしも八派の党派の拡大を結果していない。ここに、O戦線などのノンセクト・ラディカル（69年型全共斗ノンセクト・ラディカルは基本的には持続しない）で霧散し、その系譜を引きながらもその後登場したこの層は質的にはかなり異っている。が登場する根拠がある。関西に於ては、歴史的なブンド・ヘゲという党派状況に規定されて、赤ヘル—ノンセクトとして、政治的には八派解體、蜂起派を名のりつつ登場している。

八派に於ても、我々に敵対的な党派（日向や中核など）と、友

好的な党派（M I など）と両傾向が存在しており、我々の斗いは進めば進むほど、このような分解はより大規模に再生産されざるをえないし、又、意識的に分解を促進すべきである。友好的な党派は、明らかに我々の闘いにひきつけられているのであるが、直ちに我々の側に移行しえないという限界をもっており、基本的には、未だ俗流の大衆運動主義的傾向を濃厚に有している。

又、敵対派は、我々に敵対することによって、（それが党派性とされる限りに於て）ますます右傾化し、武装闘争から遠ざかり、人民階級へ転落せざるをえない。我々は従って、八派解体という場合、日向、中核などの敵対的な党派に主要打撃を集中し、そのことによって彼らの党内矛盾派矛盾を拡大させることを目標としなければならぬ。このことは、我々に心情的な友好的な党派（自分たちはやれないが、よくやってくれるという心情的共感）を政治的に解体することと一体である。

② 又、ブントや、無党派―闘闘的ノンセクト・ラディカルを八派から引き離して我々の側にひきつけることは重要なことであるが、それは、八派と同じような政治集団（統一戦線）―即ち、集会、デモのステージ―闘争での統一戦線―を作ることでない。八派とスローガンだけは違っても中身は似たりよったりの大衆運動をすることによって、第二八派ができるだけである。

（ブント派のいう蜂起統一戦線は多分にそのような傾向が濃厚であり、これにひき込まれてはならず、解体し、革命戦争統一戦線

に結合しなければならぬ。）我々のめざす統一戦線は、革命戦争の統一戦線であり、それ以外の何物でもない。それは、デモや集会の敷で計れない、目に見えない重層的な統一戦線である。その中心環は、武装闘争（武装勢力）を発展させ、拡大することであり、そのための兵站、支援網を造りあげ、又、独自の自主的な武装闘争をつくりだすことである。それはゲリラが泳ぎまわる人民の海を形成することである。

我々は、日本共産党革命左派とは全ゆる次元に於る統一戦線を形成する方向にむかっている。ブントに対しては、大衆戦線、支援網に於るレベルでの統一戦線に止めるべきである。

武装した青年が街を征く
明日を背負い 銃を肩に
われら 革命の軍隊
赤い軍隊 世界赤軍が征く

(ウエニザーマン歌集より)

連絡先

開拓社

東京都文京区本郷1-29-13 TEL03-813-1864

同志社大学二部学生会

TEL075-231-0431

頒 価 300円

4
1300